St. Luke's College of Nursing

Booklet 1

聖路加看護大学のあゆみ

改訂版

聖路加看護大学
大学史編纂・資料室　編

聖路加看護大学のあゆみ

改訂版

St. Luke's College of Nursing

St. Luke's
College of Nursing
Booklet 1

聖路加看護大学のあゆみ
改訂版

聖路加看護大学
大学史編纂・資料室　編

目次

「聖路加看護大学のあゆみ」改訂版の発刊に際して　理事長　福井　次矢
創立九〇周年に際して（二〇一〇年・初版刊行時）　理事長　日野原重明
「聖路加看護大学のあゆみ」発刊によせて（二〇一〇年・初版刊行時）　学　長　井部　俊子

1　聖路加看護大学は開学からどのような教育理念のもとに、どのような看護職を育てようとしてきたのですか。　1
2　聖路加看護大学の名前の由来を教えてください。またどのように学校の形態が変遷したのですか。　5
3　聖路加看護大学は、いつ、誰が創設したのですか。　9
4　聖路加の地は、忠臣蔵で有名な浅野内匠頭の邸跡地で外国人居留地であったと聞いています。なぜそのような地が選ばれたのですか。　13
5　聖路加国際病院付属高等看護婦学校・聖路加女子専門学校における外国人教師による看護の授業はどのようでしたか。　16
6　聖路加看護大学は米国聖公会と関係が深いと聞きましたが、どういうことですか。　20
7　聖路加の校章・校歌・校旗はどんな経緯でつくられたのですか。　24
8　米国の看護教育を取り入れていた本学は、戦時中、どのような状況になりましたか。　32
9　終戦直後、聖路加は米国に接収された時、病院や学校はどうなったのですか。　38
10　戦後日本の看護改革において聖路加の多くの卒業生が貢献したといわれていますが、具体的にはどのようなことですか。　40
11　東京看護教育模範学院の名のもとに聖路加と日本赤十字社が合同して看護教育を行ったと聞いています。その時の様子を教えてください。　45

12 学生寮があったと聞きました。寮生活はどのような様子でしたか。
また、現在の学生行事は何時からあったのですか。
それに纏わるエピソードがありますか。 48

13 聖路加看護大学と聖路加国際病院との関係を教えてください。 53

14 どのように、短期大学から大学に変わったのですか。 56

15 大学や大学院の開設時には、どのような困難がありましたか。 60

16 長く続いた女子教育の中に男子学生が
受け入れられるようになったのはなぜですか。 65

17 聖路加看護大学の学長はどのようにして選ばれるのですか。
また、歴代の学長（校長）はどのような方でしたか。 69

18 ＷＨＯコラボレーティングセンターとは
どのような役割・機能をもつセンターですか。 73

19 聖路加看護大学では「二一世紀ＣＯＥプログラム」という大型研究費を得て
看護学の分野では最先端の研究を行なったとききました。
詳しく教えてください。 77

20 聖路加の卒業生でナイチンゲール記章を受賞した人がいますか。
その方達のことを教えて下さい。 82

21 聖路加の卒業生には、開発途上国における看護活動をした人が多いと聞いていますが、
どんな活動をしているのでしょうか。 86

22 聖路加同窓会はどんな活動をしていますか。 93

23 聖ルカ礼拝堂はどのようなところですか。 96

24 聖路加看護大学には、学内のあちこちに由緒ある品が遺されていますね。 101

25 聖路加看護大学はどのような将来展望を持っていますか。 109

おもな引用・参考文献
改訂版編集後記
略年表

「聖路加看護大学のあゆみ」改訂版の発刊に際して

聖路加看護学園　理事長　福井 次矢

二〇一〇年一月に発刊されたブックレット「聖路加看護大学のあゆみ」の改訂版をお届けします。初版に続き、改訂版の発刊に尽力された方々に感謝いたします。

私は、日野原重明前理事長の後任として、二〇一二年四月一日に本学の理事長に就任以来、本学のこれまでの歴史を踏まえた将来展望を模索してきました。

本学の使命は、優れた看護職の育成と、看護界におけるリーダーの養成にあります。この使命を果たすためには、教育現場における教員と学生の間の効果的な相互反応が不可欠となります。そのためには、本学の将来像を共有し、経営管理や人事など大学の体制整備が重要となります。

そこで、本学のほとんどの教職員が参画した「将来構想委員会」での真摯な検討の結果を伺い、そこから重要度や緊急度の高い課題から改革に着手しました。

一方、看護界および医療界をはじめ、本学を取り巻く外部環境は急速かつ大きく変化しています。このことから、変化する社会状況に対応しつつ、将来、わが国の看護界においてリーダーシップを発揮できる人材を育成するためには、学生が主体的に学び、最新の研究に触れ、その適用を臨床現場など看護のあらゆる場面において観察・実践することがこれまで以上に必要となります。また、本誌でも紹介されていますように、本学のルーツは一九二〇年に設立された聖路加国際病院付属高等看護婦学校です。

このような環境変化に対応し、本学が掲げる建学の精神を具現化するためには、本学と聖路加国際メディカルセンターとの一体化が不可欠であるとの結論に至りました。

特に、看護実践と教育のリーダーとなる人材として、クリニカルナースエデュケーター（Clinical Nurse Educator、以後CNE）を育成すべく、大学院に新しいコースを設置することや、臨地実習の充実を図るためのさまざまな取り組みを企画するなど、新たな構想の実現に向けた具体策を整えつつあります。

また、より効率的な組織運営を目指して、本学の組織図や規程・規則を抜本的に見直すなど、運営体制の整備も進みつつあり、この点においては、聖路加国際メディカルセンターとの一体化により、著しい効果が期待されるところです。

二〇二〇年には、本学は創立一〇〇周年を迎えます。東京オリンピックも開催される二〇二〇年に向けて、本学の教育内容はもとより、建物・設備や運営体制など、すべての面において大きな変革が求められます。

本誌に示された、これまでの輝かしい伝統を踏まえ、目の前の改革に取り組み、新たな伝統の創出に向け、本学に関係する全ての皆様のご協力をお願い申し上げます。

創立九〇周年に際して（二〇一〇年・初版刊行時）

聖路加看護学園　理事長・名誉学長　日野原 重明

このたび、聖路加看護大学の創立九〇周年を記念して、小冊子を刊行するに当たり、長年、この大学の教育に参与して来たものとして、この記念号発行の労をとって来られた教職員・同窓生の方々に感謝の言葉を述べたいと思います。

私が一九四一年（昭和一六）に聖路加国際病院に就職した戦前は、本学は聖路加女子専門学校（St. Luke's College of Nursing）と呼ばれ、日本での最初の高等看護教育（三ヵ年の看護課程と一年の保健課程）を行っていました。私はこの聖路加女子専門学校の時代から看護教育に参与しました。日米戦争中は興健女子専門学校と改称されましたが、戦争直後は校舎は聖路加国際病院と共にＧＨＱに接収されました。ＧＨＱ公衆衛生福祉局看護課は広尾の日本赤十字社救護看護婦養成部と聖路加女子専門学校とを合同させて、東京看護教育模範学院を開き、私はそこで解剖・生理学・医科学概論等を教えました。その後、聖路加国際病院と聖路加女子専門学校の校舎の一部がＧＨＱから返還となり、一九五四年（昭和二九）には聖路加看護短期大学となり、一九六四年（昭和三九）には四年制の聖路加看護大学となりました。

私は一九七一年（昭和四六）には学長代理となり、一九七四年（昭和四九）からは学長に就任しました。

私の就任時の目標は大学院を発足することで、一九八〇年（昭和五五）には大学院修士課程を発足し、一九八八年（昭和六三）には大学院後期課程の博士課程を発足させました。

一九九六年（平成八）に聖路加国際病院からの資金提供により、新校舎として、現在の第一街区のチャペルのある建物の西側に地下一階、地上六階の建物が竣工しました。

その礎石に私は「あなた方の愛が、深い知識において、鋭い感覚において、いよいよ増し加わり、それによって、あなた方が何が重要であるかを判別することができ、キリストの日に備えて、純真で責められるところのないものとなり、イエス・キリストによる義の実に満たされて、神の栄光と誉れとを表すように至るように」という聖句を略して「知と感性と愛のアート」（平成八年九月）と刻みました。これは、新約聖書のピリピ人への手紙一章九節にあるパウロの手紙の中の文章の中から取りだした言葉で、この大学の建学精神を示す言葉であります。

聖路加看護大学はその後平成一三年には地下鉄築地駅近くに二号館として、大学院および看護実践開発研究センターとして、この土地と建物を購入し、大学が地域住民のためにも教育活動を行う事を実践して参りました。

二〇一〇年（平成二二）四月からは修士課程に周麻酔期看護学を発足させ、さらに小児看護や助産の領域での高度な実践家を養成するための課程を強化して、麻酔医、産科医、小児科医の不足する日本の医療に熟練された専門ナースが貢献することを願っています。

以上のごとく急速に変遷する看護界、医療界に本学はさらに大きく貢献することを願って、私の挨拶とします。

「聖路加看護大学のあゆみ」発刊によせて（二〇一〇年・初版刊行時）

学長　井部 俊子

聖路加看護大学が二〇一〇年（平成二二）に九〇周年を迎えるにあたり、この素敵なブックレット（小冊子）を皆さんに届けたいと思います。このブックレットは、聖路加看護大学がどのような考え方をもち、どのような変遷をたどって今日に至っているのかを二五項目のQ&Aによってわかりやすく解説しています。あなたはどの項目に注目されるでしょうか。

聖路加看護大学で学ぶということは、いったいどういうことなのでしょうか。そこでは、聖路加の精神というべきものがひとびとの中に植えつけられます。本学の価値観や伝統が伝承され、行動様式まで影響を受けるようです。

昨今、各大学は固有の特色をアピールするために〝スクール・アイデンティティー〟を大切にする、いわゆる自校教育の活動に注目しています。学生のアイデンティティーやモチベーションも自校教育とは無関係ではありません。大学への帰属意識をもってもらうことや、大学で学ぶことへの意義を見出してもらうといったいわば自己探求のための教養教育として位置づけられている大学もあります。（渡部尚子、「自校教育」の現在、学園ニュース No.288, October 2009）

聖路加看護大学は、開学以来、キリスト教精神に基づく明確なミッションをもち、モチベーションの高い学生が入学してきました。大学のミッションは、チャペルや十字塔、校舎の色彩やモニュメントに反映され、そのミッションを教育や実践の中で具現化するために、高い志をもった教職員に引き継がれてきました。このブックレットは、現代に生きるわれわれの未来に向けたメッセージでもあります。

このブックレットの完成には多くの方々の協力を得ました。二〇〇六年（平成一八）に「大学史編纂・資料室検討委員会」を発足させ歴史的資料の収集を開始いたしました。二〇〇七年度（平成一九）の創立記念講演会では、大学のアーカイブ構想と進捗状況を報告し、寺崎昌男先生（東京大学名誉教授）や川島みどり先生（日本赤十字看護大学）から助言を得ました。二〇〇八年（平成二〇）四月からは「大学史編纂・資料室」に渡部尚子先生を室長として迎えて、より精力的に活動が展開されました。本学の卒業生である大先輩からのオーラル・ヒストリーの収集も行われています。

そして、このブックレットの作成のために、ワーキンググループを作り編集作業を担っていただきました。執筆者はすべて本学の卒業生と教職員です。ブックレットにはナンバーがつけられています。今後、第一号から二号、三号と引き継がれていくことでしょう。ブックレットの作成に貢献して下さった皆さまに感謝いたします。

聖路加の未来に贈るブックレットが、本学の学生であること、卒業生であること、教職員であることを誇りに思う〝効能〟をもたらすことと信じています。

図書館内階段の踊り場に設置された
ステンドグラス

1

聖路加看護大学は開学からどのような教育理念のもとに、どのような看護職を育てようとしてきたのですか。

今私たちが立っているこの校舎は、一九九六年（平成八）に完成し、チャペルの東翼にあった校舎から引っ越してきたものです。一九三三年（昭和八）にできた校舎から、大理石のマントルピース（暖炉の飾り枠）も引っ越してきましたし、木製のデスクチェアも引っ越してきました。アリス・C・セントジョン メモリアルホールは、本学の前身である聖路加国際病院付属高等看護婦学校の教育責任者であり、『聖路加ナースの母』（Mother of St. Luke's Nurse）と呼ばれた**アリス・C・セントジョン**（Alice C. St. John）に由来しています。

本学は、一九二〇年（大正九）秋、聖路加国際病院付属高等看護婦学校に一期生が入学して以来、九〇余年を迎える今日、看護学部、看護学研究科博士前・後期課程ならびに看護実践開発研究センターを有するまでに発展してきました。本学のたゆまぬ発展の原動力は、綿々と受け継がれてきた「本邦の看護の標準の向上せしむるために」という、創立者**トイスラー**（Rudolf Bolling Teusler）の学校設立の趣

アリス・C・セントジョン

＊アリス・C・セントジョン（一八八〇～一九七五）
カナダ生れ。Ackensack病院（米国ニュージャージー州）で看護教育を受ける。コロンビア大学大学院で看護と公衆衛生を学ぶ。一九一八年（大正七）に米国聖公会から東京へ赴任。一九四一年（昭和一六）帰国。一九六一年（昭和三六）勲五等瑞宝章を受章。米国マサチューセッツ州ウィリアムス・タウンにて死去。三章・五章参照

旨にほかなりません。

一九二〇年当時、既に日本で**看護教育は始まっていました**。しかしトイスラーは、医学の水準は十分でありながら、患者が回復できないのは看護が不十分だからである、と看護婦学校を創ったのです。しかも、教育に専従するセントジョンを米国から招いた上でのことでした。**米国並びにカナダの最高の看護教育と同等**の教育を行うこと、聖路加国際病院のための看護師養成ではなく、日本の看護の質向上を目指したことが、学校開設時の特徴でした。具体的には、**高等女学校**（現在の高等学校と同等）の卒業を入学資格とし、これは現在の大学入学資格に匹敵するものでした。義務教育が小学校だった時代ですから、志願者がいないのではないかと心配されたほどの教育レベルの高さでした。また、卒業後に聖路加国際病院への就職を義務付けませんでした。この二つの特徴故に、日本の看護教育の歴史の中で、看護の高等教育は聖路加で始まったと評価されているのです。

学校開設時、個人衛生学、社会衛生、公衆衛生を開設し、後に学校保健、産婆（助産師）も教育課程に取り入れました。予防と保健を看護の中に含め、**保健師の制度**がない時代から公衆衛生看護を教育していたことも、本学の大きな特徴です。

一九〇〇年（明治三三）、トイスラーは米国聖公会の宣教医として来日し、一九〇二年（明治三五）に病院を開設しました。開拓精神に富み、キリスト教の愛

ルドルフ・B・トイスラー

＊トイスラー（一八七六～一九三四）
米国ジョージア州生れ。一八九四年（明治二七）バージニア州立医科大学卒業。同大学の病院学及び細菌学講師及助教授などを経て、一九〇〇年来日。東京の聖路加国際病院にて死去。三章参照。

＊看護教育は始まっていました
一八八五（明治一八）年に我が国で最初の看護婦養成所と言われている有志共立東京病院看護婦教育所が設立。その後、京都看病婦学校、櫻井女学校附属看護婦養成所、日本赤十字社救護看護婦養成部等が創立されたが、修業年限は一年～一年半で、入学資格、教育内容は定められなかった。内務省（当時）令看護婦規則が発令し、看護婦資格や養成所の規則ができたのは、一九一五年（大正四）である。

＊米国並びにカナダの最高の看護教育と同等
トイスラーは、我が国の看護婦養成所の規則に書かれた教科のみならず、保健・予防を含めた当時の米国・カナダの看護教育の水準に合わせ、講義と実地を合わせて三年の就学期間とし、教育者も米国から招聘した。

の精神を医療に具現することをめざしたトイスラーは、米国並びに日本国内から精力的に寄付を集め、病院と学校の建物をつくりました。一度できた建物が**関東大震災**で壊滅したあとも、さらに寄付を集め、チャペルがある病院と学校を再建しました。本学は米国聖公会の信徒をはじめとし、多くの米国市民の寄付と、ロックフェラー財団からの寄付、また日本国内からの寄付、関係機関からの理解によって建てられたのです。その根幹には、「神の栄光と人類奉仕のため」というトイスラーのキリスト教への信仰と、〝最善をつくせ、しかも一流であれ（Do your best and it must be first class）〟の精神があったことを、覚えておかなければなりません。

キリスト教の愛の精神は、**「その人に関心を持って思いやること」**と言い換えることができます。トイスラーは、この愛の精神に基づいた教育を行うこと、またこの愛の精神を持って看護を行うことを、本学の精神として明示しました。キリスト教の精神に基づいて最高の教育を行い、教養ある看護職を育成し、日本の看護の質の向上をめざすというトイスラーの志は、セントジョンによって具体化されました。セントジョンは二〇余年の長きにわたり、聖路加国際病院付属高等看護婦学校および聖路加女子専門学校の教育の責任者として、カリキュラムをつくり、教員を集め、学生には**品位（dignity）を持て**と指導されました。セントジョンは、本学のみな

＊高等女学校
一九二〇年当時、義務教育は尋常小学校のみであり、その後の教育機関として、尋常高等小学校、高等女学校があった。高等女学校は五年制で、当時の進学率は九％である。

＊保健師の制度
保健師活動の始まりは、一八八七年（明治二〇）、京都看病婦学校（同志社）の巡回看護だといわれている。一九二〇年代には聖路加国際病院なども活動に着手し、一九三五年（昭和一〇）には、聖路加国際病院から看護婦が異動して、都市型保健所のモデルケースとなった京橋保健館（現中央保健所）が設立された。その二年後に保健所法（一九三七年（昭和一二））、続いて保健婦規則（一九四一年）が制定され、訪問指導（乳幼児、結核患者などが対象）等が法の下で行われるようになった。

＊関東大震災
一九二三年（大正一二）九月一日、神奈川県相模湾沖を震源とした大地震が発生し、千葉県・茨城県から静岡県東部までの広い範囲に甚大な被害（死者・行方不明者一〇万五〇〇余人）をもたらした。

＊「その人に関心を持って思いやること」
西村哲郎チャプレン（一九九一～一九九五年、一九九七～二〇〇二年本学非常勤講師、キリスト教概論・生命倫理担当）のクリスマスでの講演から。

＊品位（dignity）を持て
前田アヤ、聖路加同窓会会員が社会に寄与するもの、聖路加同窓会だより　九九、一九九六

らず、トイスラーが望んだとおり、日本の看護教育の基礎を築き、それによって看護の質の向上に貢献したといえましょう。これは今日、本学にかかわった諸先生や卒業生、修了生が、全国の大学や医療・行政機関等で活躍していることからも確信できます。

建学から九〇余年、看護の高等教育機関としての発展は、学部教育にとどまらず、大学院教育と看護実践開発研究センターでの活動を生み出してきました。このために、二〇〇三年（平成一五）に二号館が誕生しました。また、建学当時より女子教育を行ってきましたが、二〇〇一年（平成一三）には男女共学になりました。このブックレットの後段で語られるように、本学は刻々と変化してきましたが、建学の精神は、今日、『知と感性と愛のアート』という日野原名誉理事長の銘となって、校舎の礎石に刻まれています。

（菱沼　典子）

2

聖路加看護大学の名前の由来を教えてください。またどのように学校の形態が変遷したのですか。

聖路加看護大学の英語標記はSt. Luke's College of Nursingです。この〝St. Luke's〟は後に聖人とされたルカの所有格で、〝路加〟はルカの当て字ということになります。この聖ルカは、どのような人物であったのでしょうか。ルカは、聖書に「愛する医者ルカ」（コロサイの信徒への手紙　第四章一四節）と出てくることから、医者であったと推測できます。また、**パウロ書簡にその名が記されている**ことから、伝道者パウロの随伴者であったと考えられます。おそらくこれらのルカは同一人物であったのでしょう。そして、新約聖書の**「聖ルカによる福音書」**および**「使徒言行録」**の執筆者であると考えられています。彼は、イエスの昇天から五〇～六〇年経った西暦八〇～九〇年代に、それまで収集した数々の資料をもとに、イエス・キリストの使信の歴史を書き残しました。イエス・キリストによる世界の救済の使信を伝えた医師ルカの名を、世界中の多くの病院が病院名として用いています。

＊パウロ書簡にその名が記されている
新約聖書のフィレモンへの手紙 二十四節、テモテへの第二の手紙 第四章十一節

＊「聖ルカによる福音書」
ルカによる福音書は、当時の歴史的な記述の伝統にそって記されています。他の福音書にない、罪人や貧しい人々の救い、富の危険性への警告、憐れみと愛に由来する行動の勧めなどが追加され、イエスの生涯、十字架上の死ののちに再び現われ、昇天された記述をとおして、すべての人々の解放と救済を述べ伝えています。

＊「使徒言行録」
使徒言行録は、初代キリスト者の伝道の物語を記したものです。

では、本学の形態は、この九十余年間にどのように変遷したのでしょうか。誕生から現在までをたどってみましょう。本学の初めの一歩は、一九二〇年（大正九）聖路加国際病院付属高等看護婦学校開設に遡ることができます。一九一五年（大正四）には看護婦規則が制定され、看護婦は公衆の需（じゅ）に応じ、傷病者または褥婦（じょくふ）の看護の業を為す女子で、指定された学校で教育を受け一八歳以上で看護婦試験に合格しなければなりませんでした。試験科目は人体の構造、主要器官の機能、看護方法、衛生、伝染病、消毒法、繃帯（ほうたい）術、治療器械使用、救急処置などでした。看護婦学校への入学資格は高等小学校卒業または高等女学校二年以上の課程修了程度とされましたが、本学は、高等女学校卒業者のみを受け入れて、教育を開始しました。

一九二七年（昭和二）には、本科三年、さらに公衆衛生看護等を選択する研究科一年を併せ持つ四年課程の聖路加女子専門学校となります。看護婦養成所としては、我が国唯一の最高学位の教育機関となりました。

この聖路加女子専門学校は、一九四一年（昭和一六）に興健女子専門学校と名前を変えます。それは、当時の社会情勢によるものでした。当時、日本は、米国などの世界を相手に戦おうとしておりました。聖路加は英語のセイント・ルークスの当て字ですから、敵性語そのままということができましょう。ベースボールが野球と変えられるご時勢ですから、校名も変更を余儀なくされました。健康を興すという

改称は、卒業生の小池明子（一九四一年一二月卒）によれば、当時、本校の教師であった杉靖三郎先生が、先生の恩師であり、また文部大臣であった**橋田邦彦**氏に相談をして命名されたということです。興健女子専門学校は、終戦の年の十二月に再び聖路加女子専門学校として復活しました。

聖路加国際病院は敗戦を迎えた一九四五年（昭和二〇）九月、**ＧＨＱ（連合国軍最高司令官総司令部）**に接収されました。ＧＨＱの計画により聖路加女子専門学校は日赤の敷地内に移転となり、日本赤十字社救護看護婦養成部との合同による東京看護教育模範学院として一九五三年（昭和二八）まで教育を続けました。

一九五三年、接収が一部解除された築地に戻り、翌年四月から聖路加短期大学（三年制）として、教育を再開しました。その十年後の一九六四年（昭和三九）には、聖路加看護大学となり、私学では本邦初の衛生看護学部として四年制教育を開始しました。一九七六年（昭和五一）には看護短期大学卒業生を対象とした編入学制度を全国に先駆けて開始し、一九九八年（平成一〇）まで続けました。

一九八〇年（昭和五五）には、全国で二番目、私学では初めての看護系大学院修士課程を設置、さらに、一九八八年（昭和六三）には、全国で最初の看護系大学院博士後期課程を開設しました。

一九九六年（平成八）には新校舎が完成し、現在の建物に移りました。翌

＊橋田邦彦（一八八二～一九四五）
第二次近衛内閣および東条内閣文部大臣（一九四〇・七・二二～一九四二・四・二〇）、東京大学教授

＊ＧＨＱ（General Headquaters 連合国軍最高司令官総司令部）
第二次世界大戦後、ポツダム宣言受託による無条件降伏によって、わが国におかれた連合国（事実上は米国）の最高総司令部。

一九九七年（平成九）より他学部を卒業した学士の編入制度を設け、二〇〇〇年（平成一二）四月からは男子学生の受け入れを開始しました。また、大学院修士課程に**専門看護師（CNS）**コースを開設しました。二〇〇二年（平成一四）には、築地三丁目に新たな土地と建物を得て、大学の二号館として看護実践開発研究センターを開館しました。二〇〇三年（平成一五）には文部科学省が設けた研究拠点形成費である**二一世紀COEプログラム**の交付申請が認められ、「市民主導型の健康生成をめざす看護形成拠点」としての研究が盛んとなり、これによって本学の大学院教育が一層充実しました。二〇〇五年（平成一七）には、修士課程にウィメンズヘルス・助産学専攻が増設されました。

（松谷　美和子）

＊専門看護師（CNS）
CNS: Certified Nurse Specialistの略。
専門看護師は、日本看護系大学協議会の認可を受けた専門教育課程（大学院修士課程）を修了し、日本看護協会の認定審査に合格して資格を得る。専門看護師は、複雑で解決困難な看護問題を持つ個人・家庭・集団に対する水準の高い看護を提供する。二〇〇三年現在、一一分野が特定されているが、本学は七分野の課程を開設している。

＊二一世紀COEプログラム
COE: Center of Excellence　七七頁参照。

3 聖路加看護大学は、いつ、誰が創設したのですか。

聖路加看護大学の創設について語るには、今から一五〇年前、米国聖公会による日本における宣教活動が開始されたこと、そしてこの宣教の過程において、聖路加国際病院が開設されたことを私たちは知る必要があります。

米国聖公会の日本における宣教は、一八五九年（安政六）に**ウィリアムズ主教**（Channing Moore Williams）が長崎に上陸した時に始まりました。ウィリアムズ主教は長崎から大阪、東京へと宣教を進め、一八七四年（明治七）に築地に私塾（後の立教学校）を創設したほか、医療伝道にも情熱を注ぎました。

ここで、『聖路加国際病院の一〇〇年』を繙くことにしましょう。聖路加国際病院の創設に関しては次のように述べられています。

「一八九三年、医療伝道に協力してくれていた医師が宮内庁へ異動した為、ウィリアムズ主教の後任であった**マキム主教**は後継者の宣教医を探していました。米国バージニア州にいたトイスラーがこれを耳にし、『自分は誰もやりたがらない仕事

＊ウィリアムズ主教（一八二九～一九一〇）
日本聖公会の創始者。一八六六年（慶応二）、中国・日本の「伝道主教」に任命される。「宣教の三位一体」といわれる教会・教育・医療の場においてめざましい働きをなした。

＊マキム主教（一八五二～一九三六）
一八八〇年（明治一三）来日。立教学校で教職に就く。ウィリアムズ主教の後任として、一八九三年（明治二六）より日本主教となり、多くの教育・医療・社会事業施設を設立する。

をやりたい』と東京行きを志願しました。マキム主教は、中国に宣教医師として赴任していたトイスラーの義兄であるウッドワードからトイスラーの意向を聞くと、すぐに宣教医師としての採用を決定しました。一九〇〇年、米国聖公会から派遣された第四番目の宣教医師としてトイスラーは二四歳の若さで来日しました。一九〇二年春、築地明石町に築地病院を聖路加病院と改称し診療を開始したのが、現在の聖路加国際病院の創設である。」

また、ここではトイスラーの生い立ちについても「トイスラーは、米国ジョージア州ロームで生まれました。父は、一八八一年に病死し、篤信で愛情深い母の厳しいしつけと、伯父ボーリング判事のキリスト教的訓練を受けて育ちました。バージニア州立医科大学を卒業し、二一歳で州立医学専門学校の助教授となり、メリー・ウッドワードと結婚してリッチモンドに家庭を持っていました。トイスラーは、冒険心と好奇心に富み、非常にてきぱきとした性格でした。」と述べ、若き日のトイスラーがどのようであったかについて、今日の私たちの想像を助けてくれます。

さて、聖路加国際病院における看護の始まりはどのようであったのでしょうか。聖路加病院の職員は初め、院長のトイスラーのほかは、看護婦の**荒木いよ**のみであったと述べられています。この聖路加国際病院の看護を創めたと言える荒木は立教女学院卒業後、神戸のカナダミッション経営の看護学校において看護学と医学を二年

荒木いよ

＊荒木（後に久保）いよ（一八七七～一九六九）
東京生れ。一九三四年に聖路加国際病院を退職。

間学び、神戸にて臨床看護を修めたのち、東京において外国人患者の家庭看護婦として働いていた時にトイスラーと出会ったとのことです。荒木は有能であったことから、トイスラーに勧められ、一九〇〇年（明治三三）から二年間、バージニア州リッチモンド市にあるオールド・ドミニアン病院付属看護婦学校への留学およびジョンズ・ホプキンズ病院やマウント・ウィルソン小児病院における研修を受けました。帰国後、荒木は初代の看護婦長となり、新館落成（一九三三年（昭和八））の翌年、**久保徳太郎**（第二代院長・校長）と結婚するまで総婦長を務めました。

こうして聖路加国際病院とその看護が発展していく中、聖路加看護大学は、どのように作られたのでしょうか。トイスラーは、日本で宣教医として過ごすうち、日本の病院とその建築設備や看護婦の状態については欧米にはるかに劣っていることから、看護婦の技術の向上に伴って、品位教養と社会的な地位を高めることが日本社会には必要だと考えるようになったと「ルドルフ・B・トイスラー小伝」（中村徳吉著）に述べられています。

こうして一九二〇年（大正九）、聖路加国際病院付属高等看護婦学校が明石町に設立されました。米国の当時の標準に応じた専門職者としての看護婦養成を目指し、米国から看護教師セントジョンを招聘し開校しました。入学資格を高等女学校卒業生としたことは、当時の女子看護教育においては類を見ないことであり、非常に高

＊久保徳太郎（一八七四～一九四二）
七〇頁参照

学歴でした。三年間の教育課程を有する学校としてスタートし、さらに一九二七年（昭和二）に、研究科を含めて四年間の教育課程をもつ**女子専門学校**として文部省の許可を得ました。女子の最高学府における看護教育を我が国で最初に行なったのです。

（堀内　成子）

＊女子専門学校
第二次世界大戦前におけるわが国の女子の高等教育は、大学令により国公立女子大学が設置されなかったため、女子高等師範学校および専門学校が最高学府であった。一九二七年、聖路加女子専門学校設立当時には、三二校の女子専門学校があった。

4

聖路加の地は、忠臣蔵で有名な浅野内匠頭の邸跡地で外国人居留地であったと聞いています。なぜそのような地が選ばれたのですか。

築地という地名は文字通り築かれた土地、埋立地を意味するもので、明石町界隈は江戸時代一六五七年（明暦三）の明暦の大火後、それまで海であったところを埋め立ててできた地域です。

一七〇〇年代の元禄期には、現在十字架の塔がある聖路加国際病院旧館や聖路加看護大学校舎がある土地には忠臣蔵で有名な播州赤穂藩浅野内匠頭長矩（ばんしゅうあこうはんあさのたくみのかみながのり）の上屋敷がありました。江戸時代の古地図で当時の街並みを見てみると大名や旗本の邸が建ち並び、由緒ある地域であったことが窺い知れます。

それにしても浅野家上屋敷の敷地面積八、八九〇坪、建坪三、三〇〇坪という広大な数字には驚いてしまいます。どうしてこの地に聖路加看護大学ができたのでしょう。明石町は一八六九年（明治二）から一八九九年（明治三二）まで安政五カ国条約によって外国人居留地が開設されたところです。日本の中の外国といった風情で、当時まだめずらしかったホテルなど赤レンガに木造ペンキ塗りの洋館が次々

「浅野内匠頭邸跡」の碑

と建築されました。イギリス、オランダ、スイス、ドイツなどの領事館が置かれ、一八七五年（明治八）にはアメリカ公使館が麻布善福寺より居留地に移転してきました。それに伴い、布教のため聖公会をはじめ、外国の宣教師、教育者たちが次々にミッションスクールを開設しました。明石町界隈に点在する数々の記念碑が示すとおり、立教大学や明治学院大学、青山学院、女子学院などのルーツはここだったのです。

一八五八年（安政五）には福澤諭吉はこの地に慶応義塾大学の前身となる蘭学塾を開き、明石町は異国情緒が漂うエリアで先進的な学問を学ぼうとする人々が集まる教育の街でもありました。明石町一〇番地先ロータリーの三角地に日本近代文化事始の地として「慶応義塾発祥の地」と「蘭学の泉はここに」の二つの碑が建てられています。前野良沢、杉田玄白、中川淳庵らがオランダ語の医学書ターヘルアナトミアを苦労して翻訳し、「解体新書」を著したことは有名な話です。

また、幕末から明治にかけて外国からの商社も数多く進出し、ちなみに明治時代の地図を見てみると現在聖路加看護大学が建っている場所には貿易商社がありました。貿易商社が兜町に移転した後は芥川龍之介ゆかりの耕牧舎、その後一八九五年（明治二八）から一八九九年（明治三二）にかけて立教中学の校舎と寄宿舎が建てられました。銀座方向から撮った立教中学の「六角塔」の写真が残っていて、当時

解体新書を模した「蘭学の泉はここに」の碑

の風景を見ることができます。このほかにも明石町には史跡旧跡が数多く、例えば文豪「芥川龍之介生誕の地」の碑や指紋研究で有名なヘンリー・フォールズ（Henry Faulds）の住居跡碑、さらにガス街灯や電信創業之地などがあります。

これらのことを考慮すると築地明石町は江戸時代の終わりから明治時代にかけて近代文明発祥の地であったといっても過言ではありません。ドイツ系の基督教宣教医であったトイスラーは、これらの歴史的な背景があり、ハイカラな異国情緒漂う明石町に着目して一九〇二年（明治三五）聖路加病院を開設しました。さらに一九二〇年（大正九）には、その附属学校である聖路加国際病院付属高等看護婦学校が設置されたのです。

（進藤　務）

＊ヘンリー・フォールズ（一八四三～一九三〇）
スコットランド ビース生れ。アンダーソンカレッジで医学を学ぶ。一八七四年（明治七）長老スコットランド教会の宣教師として来日、東京築地病院を開院（南小田原町）。指紋が個人の識別に使えることを発見。

5

聖路加国際病院付属高等看護婦学校・聖路加女子専門学校における外国人教師による看護の授業はどのようでしたか。

トイスラーは、レベルの高い看護教育機関を作るためにセントジョンを米国から招き、本学の前身である聖路加国際病院付属高等看護婦学校を開学しました（一九二〇年（大正九））。そして、学科課程、教育方法とも米国やカナダの看護婦学校に倣い、外国から先生を招いて教育にあたらせました。

開学当初、校長のセントジョンと副校長の**ドーン**の二人で始まった学校は、専門学校への移行期に公衆衛生看護法の**ヌノ**（Christine M. Nuno）を迎え、一九三〇年代に入ると基礎看護を始め内科・外科・小児・産科等看護法及び助産、さらに看護婦学校養成管理法・同教授法を教授できる教員を揃えました。**ピータース**（Augusta F. Peters）、**サリバン**（Margaret E. Sullivan）、**バーバー**（Ruth Barbour）、**ホワイト**（Sarah G. White）らがその先生方です。この他、英語や体操等の一般教養科目についても外国人非常勤教師が担当していました。

一九三〇年から一九三七年（昭和五～一二）の七年間は、看護科目担当の専任外国人教師が五～六名在職し、最も充実した時期でした。しかし、一九三七年日中戦争が始まると一人また一人と去り、一九四一年（昭和一六）三月二七日、セントジョンおよびヌノの二人の先生方の送別会を最後に外国人教師がいなくなりました。

聖路加女子専門学校を一九三九年（昭和一四）に卒業し、その後、ホワイトの助手を二年間務めた高橋百合子は、当時の状況を以下のように話しています。

当時の外国の先生方は、どなたも日本で看護教育をするという使命感に燃えていて、だから学生たちにも厳しい態度で接していました。先生と学生の関係は少人数であったこともあり親密で、特に実技を伴うような学習（病棟実習・調理実習など）は、つらいけどよくわかる授業でした。英語で行われる授業には通訳がいましたが、すべてが逐次で通訳されるわけではなく最初は大変でした。科目によっては卒業生が通訳してくれることもありました。

学生と一番長く接していたのは、ピータース先生でした。先生は看護原理を担当され、実習も含めると週の三分の一くらいは一緒でした。先生は病棟実習もよく巡回されていました。長身を利用して、ついたてのところから見下ろすようにして、学生が行っていることを黙ってご覧になり、それから学生に注意をしていました。その当時は、注意されないためにはどうしたらよいかばかり考えていましたが、先

＊ドーン
マリオン・ドーン（一九二〇～一九二一在任）、副校長

＊ヌノ（Christine M. Nuno）
クリスチン・M・ヌノ（一九二五～一九四〇在任）、公衆衛生看護法、個人衛生、公衆衛生諸論等担当

＊ピータース（Augusta F. Peters）
オウグスタ・F・ピーターズ（一九二〇～一九三九在任）、看護原理、看護実習、伝染病看護法等担当

＊サリバン（Margaret E. Sullivan）
マーガレット・E・サリバン（一九二〇～一九三五在任）、内科看護法、外科看護法等担当。

＊バーバー（Ruth Barbour）
ルース・バーバー（一九二一～一九三八在任）、小児看護法、産科看護法、助産法等担当。

＊ホワイト（Sarah G. White）
七〇頁参照。

生は常に相手のことを不愉快にさせないようにするにはどうしたらよいか、患者、医師、その他のスタッフの方々との関係を考えながら接していたように思います。

校長であったミセス・セントジョンは、とても威厳があり雲の上のような存在でした。ミセス・セントジョンをはじめ先生方はとても厳しく、一度言われたことに対し何回も注意を受けると、「Go home!」といわれるような状況でした。物品は決められた場所に置くこと、約束を守ること、さらには歩き方まで注意され、廊下に先生の姿が見えると学生は、一人、二人と逃げるように隠れていました。当時のことを、楽しかったという人はいないかもしれませんが、今になればそのような教育も必要であったと思います。日本人は物事を曖昧にして伝える傾向がありますが、外国の先生方ははっきり伝えていました。

教務主任であったホワイト先生の傍で助手をしましたが、どんな時でも考えて行動すること、誰であっても（もちろん学生も）尊重して接することなどを行動で示して下さり、学生への教育的関わりの意味を教わりました。ホワイト先生は大きな体から高い声を出され、学生時代は近寄ることもできない方でしたが、愉快で、暖かく、優しい方でした。

学生時代には外国の先生方の徹底した厳しさを腹立たしく感じていましたが、社会情勢が変わる時代（就職一年目は防空演習ばかりでした）に、異国の地で看護教育を担われた熱意、使命感、人間愛は、聖路加の看護の貴重な一ページになっていると思います。

戦後は、日本赤十字社救護看護婦養成部と合同で**GHQ看護職員六名**による教育も行われ（一九四六～一九五〇年）、一九四八年（昭和二三）にはホワイトがアメリカより再来日し、校長として着任されました。一九五四年（昭和二九）に聖路加短期大学として認可をうけたときにも、引き続いてホワイトが学長を務め、一九五七年（昭和三二）の退職までその任を果たされました。

トイスラーとセントジョンによる看護教育への志は、多くの外国人教師とその教えを受けた先輩方によって、次の世代へと受け継がれてきています。

（及川　郁子・高橋　百合子）

＊GHQ看護職員六名
エレナ・C・カールソン（Elenore C. Carlson）（一九四六～一九四八在任）
ドロシー・E・ツーム（Dorothy E. Toom）（一九四六～一九五〇在任）
アントワネット・P・トンプソン（Antoinette P. Thompson）（一九四六～一九四七在任）
ビリー・B・ハーター（Billie B. Harter）（一九四七～一九四九在任）
ルイズ・キンケード（Luise Kincaid）（一九四八～一九四九在任）
メリー・G・カワムラ（Mary G. Kawamura）（一九四六～一九四八在任）

6

聖路加看護大学は米国聖公会と関係が深いと聞きましたが、どういうことですか。

聖路加看護大学と米国聖公会との関係は、例えて云えば親子の関係だと云うことができます。それは米国聖公会が本学と聖路加国際病院を含む聖路加メディカルセンターの生みの親であり、歴史的にも大変深い関係にあるからです。

聖路加病院での看護教育は、米国聖公会の中国・日本での伝道活動の一環から始まりました。ですから、米国聖公会の海外伝道活動がなければ、聖路加看護大学は存在しませんでした。

日本での宣教には医療伝道が必要であると、宣教医派遣を米国聖公会本部へ要請したのは、一八五九年（安政六）にプロテスタント宣教師としては初めて長崎に派遣された、ウイリアムズ主教でした。彼は、三年間の中国と日本での多忙な伝道活動の後、一八六九年（明治二）には大阪で宣教活動を始めました。その後、一八七三年（明治六）一一月に東京伝道のために上京し、築地居留地内に立教学校（後に立教大学）を創始しました。ウィリアムズ主教の日本における宣教活動の基本的な考え方は、「日本国民に神の福音を宣べ伝えて教化する」、つまり、日本人に直接的に教えを導くのは、日本人の牧師であり、その日本人牧師を育成することが海外から来た宣教者の活動の中心であると考えました。

当時、日本における米国聖公会の宣教の拠点は、一八七四年（明治七）二月に築地居留地に立てられた立教学校と、その後一八八二年（明治一五）に立てられた東京三一神学校（とうきょうさんいちしんがっこう）でした。

また、ウィリアムズ主教は、日本において、学校教育のみならず、医療福祉事業の創まりとなる事業のためにも宣教医を米国聖公会本部に求めました。米国聖公会の日本における医療事業の貢献は、一八七四年に宣教医**ヘンリー・ラニング**（Henry Launing）を大阪に、また一八八四年（明治一七）に**フランク・ハレル**（Frank W. Harrell）を築地外国人居留地に派遣し、その地において病院や診療所を開設したことです。そして、一九〇二年（明治三五）には、トイスラーによって聖路加病院が開設されました。この聖路加病院の土地は、もともと、ウイリアムズ主教が私財を投じて購入されたことが書き残されています。このように、聖路加国際病院や聖路加看護大学は、米国聖公会の海外伝道活動によって創められました。また、看護大学を含む病院建設や礼拝堂建設の資金の多くは、トイスラーや、関東大震災で崩壊した東京・横浜ＹＭＣＡ会館復興のために来日し、後に、清里の**キープ協会**を創始

＊ヘンリー・ラニング
一八七三年（明治六）、米国聖公会より、巡遣され来日。一八八三年（明治一六）大阪の川口居留地に聖バルナバ病院を開設。

＊フランク・Ｗ・ハレル（Frank W. Harrell）
一八八四年（明治一七）、米国聖公会より派遣され来日。居留外国人相手に診療。翌年、築地一丁目の旅館あとを借り開院するも語学等の問題もあり一八八七年（明治二〇）辞任。

＊キープ協会
キープ協会は、米国人ポール・ラッシュが、第二次世界大戦で破綻した日本を再建するため、八ヶ岳山麓の農村をモデルに、酪農を中心とした高冷地農業を全国に広めるための拠点として、清里に設立した協会です。その事業を、Kiyosato Educational Experiment project（清里教育実験計画）と命名したことが、KEEP（キープ）の由来です。

したポール・ラッシュ（Paul Rusch）氏が、米国の聖公会を中心として行った募金活動に寄せられたものでした。

一八八七年（明治二〇）には、英国教会や英国海外福音伝道協会とともに、日本聖公会が設立されました。現在、日本聖公会は、米国聖公会と共に、世界にあるアングリカン・コミュニオン（Anglican Communion）のメンバーです。

トイスラーを派遣した米国聖公会の海外伝道の拠点はニューヨークのチャーチ・ミッションズ・ハウス（Church Missions House）でした。後に米国聖公会の本部となったこのチャーチ・ミッションズ・ハウスから、日本を含め世界各地に数多くの宣教師が派遣されました。

最初から米国聖公会はトイスラーにとって強い支えとなっていました。募金活動の手助けをするため、米国聖公会信者の有志によりアメリカン・カウンシル（American Council for St. Luke's）という後援会は早くから（一九一〇年（明治四三）ごろ）発足され、一九三一年（昭和六）にニューヨークで財団法人として設立されました。戦前、アメリカン・カウンシルの主な役目は米国聖公会本部から管理上の支援を受けて、プロクター・アンド・ギャンブル社のウィリアム・プロクター氏やロックフェラー財団のジョン・D. ロックフェラー氏などから、多額の寄付金を受け取り、その運用と管理をすることでした。

＊ポール・ラッシュ（一八九七～一九七九）
米国インディアナ州生れ。一九二五年（大正一四）来日。立教大学教授。一九三八年、八ヶ岳山麓に清泉寮を建設。戦後も継続して清里の公衆衛生活動に携わった。聖路加国際病院にて永眠。

戦時中、余儀なく聖路加とアメリカン・カウンシルとのつながりが断たれましたが、終戦後、交換留学プログラムを通して、聖路加の病院、看護大学の数多くの人々の継続教育を支援してきました。

今では米国聖公会と直接の関わりはありませんが、聖路加とアメリカン・カウンシルとの関係は継続しています。例えば、コロンビア大学病院（Columbia University Medical Center）、ヴィラノバ大学（Villanova University）など様々な教育機関と連携して、日本から学びに来る人への支援、指導を行っています。また、コロンビア大学を始め、アメリカから医学生を選抜して聖路加に派遣しています。

（田代 順子・ケビン シーバー）

＊ヴィラノバ大学
米国ペンシルバニア州にある一八四二年創立のカトリック系大学。看護学部を含む五学部の総合大学。

7

聖路加の校章・校歌・校旗はどんな経緯でつくられたのですか。

校章の制定

聖ルカにおける校章は、一九三一年（昭和六）の聖路加女子専門学校研究科第一回生の卒業（修了）に始まります。それ以前の聖路加国際病院付属看護婦学校および専門学校三年本科の卒業生には卒業章は与えられませんでした。卒業生全員が頂くようになったのは八年後の一九三九年（昭和一四）、本科と研究科が統合された四年一貫教育をうけた時からです。卒業章は縦菱形で、青地に周囲が白地、中央が白十字の現在の卒業章とほぼ同様のデザインでした。

一方、開学以来、在学生用の学生章はありませんでした。ところが、日中戦争以降、国家的行事に参加する機会の増えた学生たちが、学生章がないために他校と区別がつかず、怪訝な顔をされたことから学生章が必要となり、一九四一（昭和一六）年二月、校歌・校旗とともに学生章が制定されることになったのです。

七宝焼きの白を基調とした美しい学生章は、当時の校長であった橋本寛敏（はしもとひろとし）がデザインしました。

卒業章

＊橋本寛敏 七〇頁参照

楕円の形は種の形をあらわし、聖書のルカによる福音書第八章一一節にある「種は神のことばである」や、ヨハネによる福音書一二章二四節に書かれている「一粒の麦」を意味しています。それは、「一粒の麦が地に落ちて死ぬことにより豊かに実を結ぶようになる」というもので、良い種はどこにあっても芽を出し、根を生やし、花を咲かせ、結実するので、聖路加の学生も、どこに行ってもその場所で、看護の根を生やし、人々の健康のために働くようにという願いを表しています。

中央には、青いランプが描かれた白抜きの十字架が配され、周りに青地に黄色い小さな撫子（なでしこ）が描かれています。十字架は建学の精神であるキリストへの信仰、撫子は、当時入学が女子のみに限定されていたことから、日本女性を表す花として、学年の数と同じ四輪が描かれています。中央のランプは、マタイによる福音書五章一四～一五節の「あなたがたは世の光である」という聖句と、ナイチンゲールがクリミヤ戦争において、夜も傷病者を一人ひとり見舞った時のランプと、彼女が灯した近代看護への灯火を表しています。

学生章

校歌の制定

本学の校歌は、作詞・大木惇夫（おおきあつお）、作曲・山田耕筰、この両氏によって作られました。

作詞の大木は、詩人・翻訳者・作詞家であり、当時多くの校歌を作詞しています。本学校歌の作詞依頼の経緯は定かではありませんが、作詞にあたり、大木自身が夏のある夕の集いに来校し、学生と共に過ごしています。詞の中に当時の学生たちの様子が浮かびます。

作曲者である山田は、「赤とんぼ」や「からたちの花」などの作曲で知られています。山田は東京本郷で医師でキリスト教伝道者の父の下に生まれ、幼少の一時期、築地居留地六番館に住んでいました。また音楽家になってからも**築地小劇場**で音楽を担当するなど、築地と関わりのある作曲家でした。そして、当時聖路加女子専門学校の音楽の非常勤講師であった**村井ます**とは、東京音楽学校（現東京芸術大学）の先輩・後輩という関係であったことから、作曲が依頼されたのではないかと思われます。

校歌が作られた当時の思い出を、「作詞・作曲共に、何て素晴らしい方達によって出来ているんだという驚きがあった」「村井ます先生のもと、二度ほど練習した後、全校生徒がチャペルに集合して、直接山田先生のご指導を受けた。非常に熱心に歌い方その他について教えられた」「有名な山田耕筰先生がチャペルで御指導くださって感激した」と同窓生は語っています。

しかし、この校歌は、翌年の一九四二年（昭和一七）に橋本寛敏校長によって改詞されます。「興亜の御稜威」「四方の民共に栄えて」「大君の御旨かしこみ」等の皇国史観的文言がやや柔らかい表現に変えられますが、改詞された理由等については明らかではありません。この校歌は戦後暫くは封印され、聖ルカと日赤との合同教育時代にも殆ど歌われることはなかったと云われています。

校歌が、再び日の目をみたのは、米軍の接収解除によって懐かしの築地校舎に全員が戻り、新しく聖路加短期大学が開設された時でした。この時、橋本は再度校歌に手を入れました。戦時体制下の価値観で作られた歌詞を削除し、もともとある聖ルカの精神を謳う文言を残して四番からなる校歌に改めました。

その後、男子学生の入学が決まった二〇〇一年（平成一三）に**日野原重明**により三回目の編詞がなされました。戦中・戦後から今日まで教員として本学に深く関わってきた日野原は、この校歌についての思いを次のように述べています。

「日本の軍部が、満州国を中国から独立させるなどの満州事変が起こったのは一九三一年であり、その頃の日本は東南アジアへの日本進出をもくろみ、天皇を中心とした国粋思想が国内に拡がっていました。本学の校歌は、そうした時代背景の中で制定され（一九四一年）、歌詞にも**「五族協和」「大東亜共栄圏」**の考えを反映した文言が入れられました。

私は丁度この時期に聖ルカに入職しています。戦況は年を追うごとに悪化し、戦

＊築地小劇場
一九二四年（大正一三）、土方与志・小山薫によって、京橋区築地二丁目（現・中央区築地二丁目一一番地）に設立された日本初の新劇常設劇場。

＊村井ます
一九三八年（昭和一三）～一九四五年（昭和二〇）、聖路加女子専門学校・興健女子専門学校非常勤講師、音楽担当。

＊「五族協和」
一九三二年（昭和七）、日本が満州国を建国した時の理念で、五族とは日本人・朝鮮人・漢人・満州人・蒙古人を指す。

＊「大東亜共栄圏」
第二次大戦中、日本を盟主とし、東及び東南アジアに共存共栄する国家を建設しようとする構想。

＊日野原重明
七一頁参照

聖路加看護大学校歌の変遷

（一九四一年）

一、白楊の緑すがしく
　學び舍は光みちたり
　いざ友よ集ひ励まん
　人の世に愛をもたらす
　いと聖き努に起つと

二、不盡が嶺の清きこゝろに
　新しき科學の技を
　いざ友よ享けて繼がなん
　傷つける病める人等の
　慰めとならん

三、輝かし興亜の御稜威
　四方の民共に榮えよ
　いざ友よこゝろみがかん
　大君の御旨かしこみ
　美しく烈しく生きん

四、大空に神は在して
　學び舍は愛にみちたり
　いざ友よ荊棘越えなん
　日の本の乙女われらぞ
　希望もて星を仰がん

（一九四二年）

一、白楊の緑すがしく
　學び舍は光みちたり
　いざ友よ集ひ励まん
　人の世に愛をもたらす
　いと聖き　努に起つと

二、不盡が嶺の清きこゝろに
　新しき知慧と技とを
　いざ友よ享けて仕えん
　傷つける病める人等の
　慰めと力とならん

三、輝かし興亜の朝
　興健の旗高く掲げ
　いざ友よいばら越えなん
　日本の乙女われらぞ
　美しく烈しく生きん

四、大空に神はいまして
　学び舍は　愛にみちたり
　いざ友よ　いばらこえなん
　日の本の　乙女われらぞ
　望もて　星を仰がん

（一九五四年）

一、白楊の緑すがしく
　学び舍は光みちたり
　いざ友よ集いはげまん
　人の世に愛をもたらす
　いと清き　つとめに立つと

二、輝かし金の十字架
　みさとしはかしこにぞあり
　いざ友よ心みがかん
　公につかえまつりて
　美しく　はげしく生きん

三、不二がねの清き心に
　聖路加の　ちえとわざとを
　いざ友よ　うけてつがなん
　傷つける　病める人らの
　なぐさめと　力とならん

四、大空に神はいまして
　学び舍は　愛にみちたり
　いざ友よ　いばらこえなん
　日の本の　乙女われらぞ
　望もて　星を仰がん

（二〇〇一年）

一、白楊の緑すがしく
　学び舍は　光みちたり
　いざ友よ　集いはげまん
　人の世に　愛をもたらす
　いと清き　つとめに立つと

二、輝かし金の十字架
　みさとしはかしこにぞあり
　いざ友よ心みがかん
　世の人にこの身ささげて
　美しく　はげしく生きん

三、不二がねの清き心に
　聖路加の　ちえとわざとを
　いざ友よ　うけてつがなん
　傷つける　病める人らの
　なぐさめと　力とならん

四、天地を造りたまいし
　神を讃め　愛に応えて
　いざ友よ　試練にも耐え
　看とる人に　優しき手を
　さしのべて　癒しを祈らん

争末期には学校も教員・学生も抑圧され、極めて困難な逆境の時代の中で生きていると云う感じでした。

記憶が定かではないのですが、一九四二年の校歌をみると、三節と四節が最初のものに比べ変わっています。これは橋本先生の軍部に対するささやかな抵抗だったのかもしれません。また、橋本先生と私は、その様な時代だからこそ学生に愛される歌が必要と考え、検閲に触れない歌詞を用いた**「興健女子専門学校生徒歌」**も作りました。

戦後暫くして、校歌は新しい時代と聖路加本来の精神を讃えた歌詞に編詞され永く歌い継がれました。中でも歌詞の『美しくはげしく生きん』の言葉は、橋本先生が特に愛された言葉です。現在の校歌は、二〇〇一年、本学の学則変更により、男女共学となったことから第四節を「女子学生も男子学生も共に癒しへのケアに携わる」という表現に変えています」。

また、日野原は、校歌のメロディーについても、最初の一小節が、「この道はいつか来た道」の最初の一小節と同じ〝ヘ〟長調で始まり、同じ和音が使われたことを、山田耕筰氏から、直接、伺ったことがあるそうです。

校歌の他にも、本学には、石山修平作詞・安部正義作曲の**学園讃歌**、卒業式に歌われる門馬常次作詞**卒業の歌**（作曲者不明）、橋本寛敏作詞・日野原重明作曲の**聖**

＊「興健女子専門学校生徒歌」
　橋本寛敏作詞、日野原重明作曲。一九四四年（昭和一九）四月作成。戦後、校名の復活により「聖路加女子専門学校生徒歌」としたが、日赤で合同教育が行われていた東京看護教育模範学院時代、またその後の短期大学時代には殆ど歌われることがなかった。一九六四年（昭和三九）、本学は大学に昇格し、タイトルを「聖ルカ看護大学　学生歌（看護を学ぶ乙女たちへの歌）」と替えて今日に至っている。

＊学園讃歌
　一九四〇年（昭和一五）制定
　作詞：石山修平
　作曲：安部正義

＊卒業の歌
　制定年不明。卒業生の話によると一九四〇年頃には既に存在。
　作詞：立教女学院理事長・国語教師、門馬常次と云われている
　作曲：不明。

＊聖路加看護大学学生歌
　一九四四年（昭和一九）四月制定
　作詞：橋本寛敏
　作曲：日野原重明

路加看護大学学生歌の学内歌があります。

校旗の制定

残念ながら、本学の校旗は行方知れずとなっています。戦争直後の米軍による校舎接収以降五回の引っ越しを繰り返すうちに分からなくなったのでしょう。旗の由来やデザインについての記録も見つかっていません。ただ、当時の在校生の記憶や写真から、凡そ一二〇センチ掛ける五〇センチの縦長形状、紫紺地中央に羽を広げた鷲と校章、下段に聖路加女子専門の校名を配し下端にモールの飾りのついた旗であることは判明しています。しかし、校旗制定五カ月後に校名が変更され、その部分は「興健女子専門学校」と書かれた別布で覆われました。

卒業生の飯泉智（一九四四年卒）は校旗について次の様に語っています。「校旗の模様などは忘れてしまいましたが、学外行事・学内行事の時にいつも校旗があったのを覚えています。戦時下ではありましたが、聖ルカの様なキリスト教の学校が、軍隊の様に旗を持つことは似つかわしくなくとても違和感を抱きました。」

本学の学生章・校歌・校旗は、その制定時期や卒業生の話から推測するに、当時の社会状況や外部圧力に押されて制定され、また戦後、国の民主化や教育改革、本学の教育体制・教育内容の変更によって幾たびか変更されました。しかしこれらは

1943年　戦時救護訓練で校旗を掲げる学生

聖路加看護大学の使命そして理念を表す象徴として末長く引き継がれていくことでしょう。

（安ヶ平 伸枝・渡部 尚子）

8

米国の看護教育を取り入れていた本学は、戦時中、どのような状況になりましたか。

一九四一年（昭和一六）七月、聖路加女子専門学校は、日中戦争下の厳しい国内情勢に対応するため、校名を興健女子専門学校と改称しました。その前年には、病院および学校運営に関わる外国籍の人々に対して政府からの干渉が始まり、聖路加女子学園においても二名の外国人理事の辞任、続いてセントジョンと公衆衛生看護学担当のヌノがその職を辞し、学園を去りました（一九四一年三月）。興健女子専門学校は、学校の支柱ともいうべき重要人物を失った中、日本人教師のみによる学校運営と、激動する社会への対応という大きな難題を抱えながら船出することになります。

この時期の状況について同窓会「会報」（一九四一年一二月発刊）は次の様に記述しています。「…（前略）…、昭和一二年日支事変起こりてより我国内外の情勢次第に変化し、昭和一五年に至り、我国民子女の教育は外国依存を排し、我国民自の手によって行わなければならぬとの興論が盛んに成った。…（中略）…。然れども教育の精神に於いては我国本来の精神を発揚すべきは勿論である。殊に我国女性の美徳は益々涵養せねばならぬ。また学術技能に関する教育法に於いても、我国状に最も適する道を執るべき秋は漸く到来した。依って昭和一五年十月一一日学校行政に直接関与する職責を負うセントジョン女史其他は自発的に退職し有能なる卒業生に道を譲った（原文ママ）」。また、学校の沿革については、発展道程を三期に分け、第一期を聖路加国際病院付属高等看護婦学校時代の胎児期、第二期を聖路加女子専門学校時代の外国依存の乳児期、そして第三期の興健女子専門学校は眞に我国状に適する教育を授くる学校として成長する時期だとその決意の程を述べています。興健女子専門学校の目的や校歌にも、〝報国の精神に燃立ち〟、〝輝かし興亜の御稜威（みいつ）〟、〝大君の御旨かしこみ〟など往時政府に阿（おもね）る様な文言が見られます。また興健女子専門学校となる直前に学校報国団綱領や報国団のための校旗も定められ、教職員・学生も戦争状況に巻き込まれていきました。

興健女子専門学校は改称とともに学則の一部を改正し、従来の修業年限四年の本科の他に修業年限二年の別科を附設しました。本科における教授では保健婦および中等教員免許取得の内容に加えて助産婦の教育内容も強化され、卒業生は看護婦・保健婦・中等学校教員免許（生理及び衛生）が無試験で付与される他、助産婦についても登録が可能となりました。しかし、四年間の教育も、**大学等の修業年限短縮**

大学等の修業年限短縮の省令
日中戦争の進展に伴い、国は国防および労務要因確保のため、一九三八年（昭和一三）に「国家総動員法」、一九三九年（昭和一四）に「国民徴用令」を制定。しかし、戦局悪化に及び、一九四一年一〇月一六日に「大学学部ノ在学年限又ハ大学予科、高等学校高等科、専門学校若ハ実業学校ノ修業年限ハ当分ノ内夫々六月以内之ヲ短縮スルコトヲ得」とした勅令を公布。これにより大学等の修業年限が一九四一年度には三か月、次年度からは六か月短縮。所謂、戦時下繰り上げ卒業を実施。

の省令によって六ヵ月短縮されるばかりか、日増しに悪化する戦況下で学生も救護の役割を与えられ、とても勉学に励む状況ではありませんでした。ただ、こうした状況においても、心の拠りどころであったチャペルでの朝礼拝は、出席できる学生と竹田牧師とともに慎ましく続けられたということです。

一九四三年（昭和一八）入学の今村節子（旧姓　宮内、一九四七卒）は、この当時の状況を次のように述べています。

日中戦争から太平洋戦争へと戦火拡大のなか、健民健兵運動や戦意高揚の掛け声が日増しに大きくなり、日常生活の言葉にも例えば学校の運動種目のバレーは排球、テニスは庭球等、敵国語廃止が勧められていました。

その頃、私の学校ではいち早く「保健」の授業科目が加わり、教師として聖路加女子専門学校卒業の方々**七名が赴任してこられました**。当時、女教師といえば、高等師範学校か女学校専攻科卒業の方々が普通でしたから、初めて聞く校名に驚いたものでした。

一方、専ら良妻賢母教育を旨としてきた女学校教育のなかにも、女性の自立が真剣に考え始められていました。

このような中で、私が選択し請求した聖路加女子専門学校の入学案内・願書の校

戦時救護訓練

＊七名が赴任してこられました。
一九四一年、当時鹿児島県学務部長であった加藤精三氏が県立女子高等女学校の「保健科」及び県内保健婦養成の為の教師を聖路加に要請し、聖路加女子専門学校・興健女子専門学校の卒業生が同県に赴任した。
藤田イチ（一九三四年卒）・萱谷栄子（一九四一年卒）・今井百代（一九四〇年卒）・坂梅（一九四一年卒）・佐藤田鶴子（一九四一年卒）・柴田明子（一九四一年卒）・木村そめよ（一九四一年卒）

名は「興健女子専門学校」となっておりました。入学後のバッジにも「興健」の文字が刻まれていました。

入学に先立つ入寮にあたって、ことのほか有難く感じたのは案内書に「寝具不要」とあったことです。当然必要と思っていましたから不安でもありました。寮は一部屋二人、机・本棚・ベッド・クローゼットが合理的に整備されていました。

授業開始にあたっては、専門科目の多さに驚いたり、珍しさに胸躍らせたり、日々充実感、学べる希望がありました。唯、参考書が得られず、神田の古書店のことを聞いて、何回か通い、岩波文庫の「解剖生理」を手にした喜びは忘れられません。

各実習の充実・徹底さも驚きでした。特に「基礎看護実習」は見たこともなかった実習室、物品の整備、時には無駄では?と反発を覚えることもありましたが、あの訓練の意義は理解しよう、感じ取ろうとする者にこそ得られる言語表現を超えたものであり、単にテクニック（技術）ではなく、アート（芸術）への探究を示唆するものであったと思います。

疾病や看護に関する専門科目に先立って教えられた「個人衛生」は、日常の生活習慣に関する事項が大部分で、小学校入学時を想起させる内容でさえありましたが、例えば姿勢歩き方等について、人体の解剖・生理学的根拠に基づく「正しさ」の理解から、具体的行動表現を体得し、結果の美しさを評価・確認する。即ち好ま

しい行為を自覚し習慣化することが目標となっていました。

入学から約半年後、冷たい雨の中、明治神宮外苑に**学徒出陣**を見送る女子学生集団の列に加わったことも忘れられません。

以後、体育の時間は担架訓練・患者搬送法等に代わり、戦局激化の中、短期間ながら軍需工場にも行きましたが、本土空襲が始まり、病院へ被災者が搬送されるようになって、学生は臨床実習場と同一場所の看護を担うことになりました。

昼夜をわかたない空襲警報発令の中、着のみ着のまま過ごす日々が多くなりました。たまたま分娩室実習中、灯火管制下で初産の方の分娩介助をすることになりました。日頃技術の立派さ、美しさが評判の助産師の指導で、緊張と胸の高鳴りを覚えながら、無事終了できた時の安堵感を今も鮮明に思い出します。

一九四五年（昭和二〇）三月一〇日の東京大空襲の夜以降は、チャペルからロビーへと急造ベットが並び被災者の看護に当たりました。

やがて終戦を迎え、学生は一時自宅待機となりました。また、爆撃を免れた病院と学校の施設は、米国陸軍病院として接収されてしまいました。

十月には、授業再開の通知を受けて帰校しました。東京都保健所の仮校舎から日本赤十字社中央病院へと移転し、私共は仮進級の四年生となり、正規の授業が開始

＊学徒出陣
一九三三年（昭和一八）一〇月二日、国より在学徴集延期臨床特例の勅令。文科系学生（大学・高等学校・専門学校）の徴兵猶予の停止。以後、全国各地で出陣学徒の壮行会盛んとなる。明治神宮外苑競技場での壮行会は、同年一〇月二一日雨天の中挙行。東京近郊七七校が参加、六万五〇〇〇人の民衆が学徒行進を見守ったと云われる。

されることとなりました。戦後の混沌とした中で未来へ向かって活躍する自覚を新たにしたのでした。

一九四六年（昭和二一）六月、GHQの指導の下、聖路加女子専門学校と日本赤十字救護看護婦養成部は東京看護教育模範学院となりました。

戦中から戦後へと国家の有り様は一八〇度の転換をする中、私たちが受けた学校教育は一貫しておりました。戦中・戦後、非常時・平時どんな時代でもどんな事態になろうとも「看護」の必要がある限り、学びもそこにある。「看護」とはそのようなものであることを体得しました。それを貫いていたものは教育の不易と流行の堅持。不易とは学びの基礎、基本となる不変なもの、流行とは臨機応変に変化順応させるものです。それは理論と実習という授業形態から取得した成果であろうかと思います。

正に激動のなかで過ごした四年間の学校生活でしたが、その後の私の職業生活においては言うまでも無く、人生のバックボーンとなって今日まで生きているといえます。

（渡部 尚子・今村 節子）

9

終戦直後、聖路加は米国に接収された時、病院や学校はどうなったのですか。

一九四五年（昭和二〇）八月一五日、第二次世界大戦が終結しました。それからまもなく、九月には、聖路加国際病院と聖路加女子専門学校の建物は、ＧＨＱにより接収され、米国陸軍第八軍第四二病院となりました。病院は、当時明石町にあった都立整形外科病院を借り受け、同年一一月には聖路加診療所を開設して診療を開始しました。病床数二四床と小規模ながらも、あらゆる病院機能を持ったモデル病院とされ、全国の病院管理の先駆的存在となりました。

教育施設としての建物を失った聖路加女子専門学校は当面休校となり、学校側の指示により学生たちは郷里に帰りました。しかしその年（一九四五年）の一〇月には、臨接する中央保健所の一部を教室として借り受け、授業を再開しています。学生の宿舎として、当時、明石町にあった松屋従業員宿舎を借り受け、宿舎に入らない学生は自宅、あるいは知り合いの家から通学していました。

一九四六（昭和二一）年六月、聖路加女子専門学校は、渋谷区宮代町にあった日本赤十字社中央病院内に場所を移し、日本赤十字社救護看護婦養成部との合同教育を開始します。この機関は東京看護教育模範学院とよばれ、ＧＨＱの発案および指導によって設置されましたが、戦後の新しいカリキュラムを試行する場として、また全国にある看護学校の模範（モデルスクール）としての目的と役割がありました。東京看護教育模範学院としての教育は、一九五二年（昭和二七）三月まで続きました。

一九五三年（昭和二八）二月、聖路加国際病院の一部（木造の旧館建物）が接収を解除されて返還されました。病院は、早速、一四〇床を擁する施設として改修工事に取り掛かり、徐々に病院本来の業務を取り戻しはじめました。

一方、渋谷区宮代町の日本赤十字社中央病院にいた学生も徐々に築地に戻り、一九五三年十月には改修された木造教室で全員が授業を受けるようになりました。

それから三年後の一九五六年（昭和三一）五月、約一一年の年月を経てようやく、聖路加国際病院と聖路加女子専門学校のすべての建物が返還されました。

（麻原 きよみ・内田 卿子）

GHQ接収時の米国旗が翻る聖路加国際病院

10

戦後日本の看護改革において聖路加の多くの卒業生が貢献したといわれていますが、具体的にはどのようなことですか。

第二次世界大戦後の日本は、敗戦国として連合国軍に占領され、ＧＨＱの指導の下に戦後復興にあたることになりました。国民は戦禍で疲弊し、食物も十分ではなく、衛生状態もよくありませんでした。国民の保健衛生状況を改善するために早急に医療のしくみを整える必要がありました。そのひとつが看護改革でした。この改革には、聖路加で教育を受けた多くの先輩が貢献しました。

看護改革は、看護関連法規を整え法規に基づいた看護行政を行うこと、看護教育のリーダーを育成し、新制度のもとに始められた専門学校教育の充実をはかり、より高い水準の看護を普及すること、改革以前に教育を受けた看護職者の再教育を行うことなどでした。やがて、日本でも看護の大学教育が行われることになりました。これから、これらの経緯をたどってみましょう。

戦後、聖路加女子専門学校は、ＧＨＱの接収により築地の校舎を追われて困難な

局面にありました。当時、ＧＨＱ看護課長にあった**オルト**大尉（Grace Elizabeth Alt）は、戦前米国聖公会のミッションにより建てられた日本で唯一の看護専門学校を何とか発展させたいと考え、一九四六年（昭和二一）、聖路加女子専門学校と日本赤十字社救護看護婦養成部とを合同させ、新たに東京看護教育模範学院として、日本の看護改革の担い手となる看護教育者リーダーの養成に着手しました。

この模範学院時代の教員として幾人もの卒業生が活躍しました。**同じ目的**で一九四八年（昭和二三）に開設された国立岡山病院附属模範高等看護学院では、看護教育者として聖路加から五名の教員が赴任しました。これら看護教育者リーダーを養成する学校からは、その期待通り次代の看護のリーダーが数多く輩出されました。また、新制度による看護教育機関には、多くの卒業生が責任者として就任しました。

一九四六年一一月には、それ迄、別々の団体として存在していた三つの看護職能団体が発展的に解消し、日本産婆看護婦保健婦協会を設立、一九五一年（昭和二六）には現在の日本看護協会に改名しました。この職能団体の創立当時の役員にも、聖路加の卒業生の名がありました。

一九四八年には保健婦助産婦看護婦法（以下、保助看法）が制定されました。三年後の一九五一年にはその一部が改正され、改正に当たって看護制度審議会が設置

＊オルト（一九〇四年～一九七八年）
一九三三年（昭和八）、ジョンズホプキンズ看護学校卒業後、教員養成及びミッショナリーとしての教育を受ける。一九四五年（昭和二〇）九月～一九五一年五月、ＧＨＱ公衆衛生福祉局看護課課長としてわが国の看護制度、看護教育、看護職能団体等の改革を推進。

＊同じ目的
さらに同じ目的で国立東京第一病院附属看護婦学校も看護教育のモデルスクールとなった。

されました。聖路加からは橋本寛敏（聖路加国際病院長）、湯槙ますらが委員として活躍しました。さらに、法規に基づいた保健婦助産婦看護婦国家試験のための審議会が設置され、ここに聖路加の卒業生が多く含まれました。

保助看法の制定により、一九四八年には厚生省医務局に看護課が新設されました。戦前より厚生省に在職していた同窓生**金子光**は三代目看護課長として看護行政を担い（**一九五〇～一九六〇**）、その後、東京大学助教授、衆議院議員等（**一九七二～一九九〇**）を歴任し、**看護制度改革**に貢献しました。

看護制度改革の一環として、一九四六年、新制度以前に教育された保健婦の再教育が国、都道府県、日本保健婦協会で開催されたのを契機として、厚生省看護課と看護協会の共催で保・助・看の全看護職の再教育が実施されていきました。現職看護婦のための看護教育指導者講習会委員には湯本きみらの卒業生が就任し、リフレッシャーコースにおける新しい看護の教育は、これら委員のほか、湯槙ます、高橋シュンらが担当しました。また、保健婦の教育に関する厚生省主催の協議会には卒業生の三浦貞らが出席しており、岡田菊枝らは、保健婦のテキストの執筆や再教育に携わりました。

ＧＨＱの公衆衛生強化指導により一九四七年（昭和二二）には**新しい保健所法**が制定され、各都道府県に一ヶ所ずつ模範保健所がつくられました。このため模範保

＊金子光（一九一四～二〇〇五）
一九三五年（昭和一〇）本学卒業。厚生省医務局の初代看護課長は、一九四八年七月一五日～三〇日までの一六日間、医務課長高田浩運が兼任し、「保健婦助産婦看護婦法」が公布された翌日の七月三一日より二代目保良せきが看護課長に就任、金子光は三代目である。

＊一九五〇～一九六〇
一九五六年（昭和三一）三月三一日厚生省は看護課を廃止し医事課に統合、一九六三年（昭和三八）四月一日より看護課が復活したため、金子は一九五〇（昭和二五）～一九五六年看護課長、一九五六～一九六〇年（昭和三五）看護参事官として務め、一九六〇年～一九六三年は永野貞（一九三二卒）が看護参事官となり、その後看護課長として一九七〇年（昭和四五）まで務めた。

＊一九七二～一九九〇
この間、金子は、日本看護専門委員会会長、ＩＣＮ教育委員、ＷＨＯ看護専門委員等を歴任。

＊看護制度改革
金子光の著書「看護の灯高く掲げて」は、看護行政と看護教育の中枢に身を置き、一七年に及ぶ国会活動を通して看護界と関わり続けた六〇余年の振り返りであり、二一世紀の日本の看護を考える上での貴重な資料である。

＊新しい保健所法
平成六年より地域保健法に改題。

健所のモデル保健所として東京都杉並保健所を整備することになりました。モデル保健所運営に先立ち、ＧＨＱの指示で衛生部長や保健所長への保健婦活動のデモンストレーションを行ったのは、平井雅恵、前田アヤ、金子光、小林富美栄でした。

また、戦後の社会経済混乱期にあって、食糧増産と引揚者、戦災者、復員軍人らの失業対策は緊急に進めるべきことがらでした。その一環として、一九四七年から制度化された開拓保健婦設置事業がありました。初期には、開拓という重労働に見合う栄養補給や生活環境の整備、応急手当が必要でした。農林省農地局入植営農課で保健婦の立場で活躍したのが崎川サン子でした。戦前より東京都渋谷保健所婦長として着任していた渡邊モトヱは、保健婦の職位の向上にも貢献しました。

一九五二年（昭和二七）には高知県立女子大学家政学部に衛生看護学科が誕生し、翌一九五三年（昭和二八）には東京大学医学部衛生看護学科が設置されました。我が国初のこの国立大学四年制看護系学科創設期の看護教員には、湯槙ますを中心とした卒業生が看護系教員としてアカデミックな世界に挑み、活躍しました。

こうして、聖路加の看護教育を受けた先輩たちは、ＧＨＱ看護課とともに看護政策、教育、実践のすべてにおいて戦後日本の看護を「新しい看護」へと生まれ変わらせるための種まきをしました。我が国看護界の歴史に残るこの戦後看護改革に、これ程まで多くの聖路加出身者がかかわることができたのは、おそらく大学卒業に

表一　戦後の看護改革期に活躍した卒業生

東京看護教育模範学院の教員	
湯槙ます	（一九二四年卒）
前田アヤ	（一九二〇年卒）
高橋シュン	（一九三五年卒）
細貝（白井）怜子	（一九四一年卒）
檜垣マサ	（一九四三年卒）
吉田時子	（一九四三年卒）
内田靖子	（一九四七年卒）
今村（宮内）節子	（一九四七年卒）
国立岡山病院附属高等看護学院の教員	
榊（簡宮）秀子	（一九三四年卒）
白井怜子	（前掲）
小野（小室）規矩子	（一九四五年卒）
三近（中野）輝子	（一九四七年卒）
北村（生方）玉枝	（一九四七年厚生科卒）
現職看護婦のための看護教育指導者講習会委員	
湯本きみ	（一九一八年卒）
平井（安藤）雅恵	（一九二八年卒）
金子光	（前掲）
看護婦のリフレッシャーコース担当教員	
湯槙ます	（前掲）
高橋シュン	（前掲）
厚生省主催保健婦教育協議会委員	
永野（三浦）貞	（一九三二年卒）
中道千鶴子	（一九三六年卒）
渡邊（杉野）モトヱ	（一九三〇年卒）
橋本秀子	（一九四一年卒）
保健婦のテキストの執筆及び再教育	
岡田（清水）菊枝	（一九三四年卒）
中道千鶴子	（前掲）
永野（三浦）貞	（前掲）
衛生部長・保健所長への保健婦活動のデモンストレーション	
平井（安藤）雅恵	（前掲）
前田アヤ	（前掲）
金子光	（前掲）
小林富美栄	（一九四一年卒）

相当する唯一の看護専門学校で教育を受けていること、またそれは、当時最も進んだ米国・カナダの教育内容であったこと、そして看護婦は云うまでもなく保健婦・助産婦・学校教員等、多くの看護分野に通用する資格を有していたこと等の理由によるものだと思われます。これらのはたらきにより、本学は看護教育の最高峰と位置づけられ今日に至っています。

（松谷 美和子・飯田 澄美子）

農林省農地局入植営農課における保健婦活動	
崎川（小野寺）サンノ子	（一九三四年卒）
保健婦の職位の向上	
渡邊（杉野）モトヱ	（前掲）
国立大学の四年制看護学科創設期の看護教員	
湯模ます	（前掲）
中道千鶴子	（前掲）
橋本秀子	
今村（宮内）節子	（一九四七年卒）
木下（亀田）安子	（一九四八年卒）
飯田（戸次）澄美子	（一九五二年卒）
馬場（宮島）昌子	（一九五三年卒）

（注）初出の氏名は「姓（旧姓）名」の順で記し、活躍当時のものと思われる資料上に表記された名前の振り仮名を付記した。

11

東京看護教育模範学院の名のもとに聖路加と日本赤十字社が合同して看護教育を行ったと聞いています。その時の様子を教えてください。

東京看護教育模範学院（以下「模範学院」）がスタートしたのは、太平洋戦争で日本が敗戦国となった翌年の一九四六年（昭和二一）六月のことです。当時は占領軍であるGHQがリーダーシップをとり、日本の劣悪な公衆衛生の状況を改善するため政策を展開していました。その改革プログラムの一つとして、GHQの公衆衛生福祉局看護課の指導のもと、看護教育改革が図られていきます。担当した看護課長はオルト大尉、日本側は厚生省で保健婦行政に携わっていた金子光が中心になって対応することになったのです。

当時の看護教育は、今のように国が定めた教育課程はなく、さまざまな教育を経て、国家試験もなく看護婦や保健婦・産婆（助産婦）になっており、専門性も低い状況でした。そうしたなか、聖路加女子専門学校だけは、戦前よりトイスラー、セントジョンにより米国式の近代的な看護教育が行われており、当時、国内で**唯一文部省から認可された看護の専門学校**でありました。

＊唯一文部省から認可された看護の専門学校　六頁参照

ＧＨＱは、金子とともに日本の医療事情を視察し、看護婦の仕事は、掃除や洗濯などではなく、ベッドサイドでの患者の世話に責任を持つことであると、広く理解してもらうことが必要であると考え、看護婦養成の充実を検討しました。ところが、その推進の協力相手と考えていた聖路加女子専門学校は、米軍に校舎を接収され、学び舎を失っている状況にありました。そこで、戦後日本の看護を担う人材を育成するための学校は、聖路加女子専門学校と日本赤十字社救護看護婦養成部を合同して展開するという計画がたてられました。日赤は、聖路加女子専門学校と同じ資格を得るために急遽文部省に申請し、日本赤十字女子専門学校となった後に合同したのです。聖路加女子専門学校は、宿舎及び教室を宮代町（現在も日赤がある渋谷の地）に移し、日本における看護教育の**モデルスクール**としてスタートします。現在の三年制の看護教育の基礎が築かれたのです。

米国式の個人を尊重する教育とキリスト教精神をバックボーンとした、リベラルな校風をもつ聖路加と、軍隊式に厳しく階級が分けられた組織で、看護学生も病院職員として働くことが期待されていた日赤の全く異なる文化をもつ二つの学校が、一つ屋根の下に学ぶということは容易ではなかったようです。日赤では学生実習は病院の労働力として扱われ、学生に一人夜勤も課していましたが、このような考えは聖路加の教育にはなく、一つの象徴的なエピソードとして語られています。

＊モデルスクール
東京看護教育模範学院以外のモデルスクールとして、国立岡山病院附属模範高等看護学院、国立東京第一病院附属高等看護学院が指定された。

東京看護教育模範学院の先生たち

合同の話が出された僅か一ヶ月後に教育が開始されたことは驚愕に値します。模範学院は、八年間という短い期間に、数回にわたりカリキュラムを変更しています。中でも特徴的なのは、看護基礎教育のカリキュラムでありながら、「環境衛生・産業衛生・学校衛生・個人衛生・公衆衛生概論・公衆衛生看護」といった科目がもり込まれており、当時から先輩たちは、病院中心の看護だけではなく、地域住民のための看護を教わっていたことを確認することができます。

両校の合同は、教育内容についての合同であって、組織は別法人で予算も別だったことも興味深いところです。東京看護教育模範学院時代に三八九名が卒業しておりますが、卒業証書は、聖路加、日赤それぞれより、また模範学院からは**模範学院長名で修業證書が授与**されています。

聖路加国際病院の接収が解かれると、さまざまな思い出のある東京看護教育模範学院の歴史も終わりを告げます。この模範学院時代に米国からの多大な支援を受けながらわが国の看護教育の近代化の一歩が幕を開けたことは確かなようです。

（山田　雅子・岩間　節子）

＊合同の話が出された僅か一ヶ月後に教育が開始
一九四六年四月三〇日、日本赤十字社・聖路加女子専門学校・ＧＨＱの三者間で日赤と聖路加の教育について左記六項目の覚書を交わす。
①トレーニングは日本赤十字社中央病院において六月一日より開始。
②三年間のカリキュラムは三者の代表によって組立てる。
③インストラクターは三者によって任命される。
④聖路加の教員・学生は日赤の寮に住むよう調整する。
⑤五名のＧＨＱ看護婦が管理と教授を援助、学校の方針には関与しない。
⑥日本赤十字社中央病院を臨床実習のために使用する。

＊模範学院長名で修業證書が授与
東京看護教育模範学院長は、日本赤十字社副社長が務めた。初期の證書には、ＧＨＱ看護教員の署名もある。

12

学生寮があったと聞きました。寮生活はどのような様子でしたか。また、現在の学生行事は何時からあったのですか。それに纏（まつ）わるエピソードがありますか。

〔学生寮〕

学生寮は、本学の前身である聖路加国際病院付属高等看護婦学校の創立とともに作られました。寮生活について短期大学時代を過ごしたある卒業生は「まるで修道院のような管理された生活」と話していました。朝五時四五分に起床し、洗面・部屋の掃除の後、ユニフォームに着替え、朝食を摂って、六時四五分からの朝の礼拝を終えると、そのまま病院で入院患者のＡＭケア（洗面、歯磨きなどの介助）を行うことから一日が始まります。ＡＭケアでは一学生あたり一、二名の患者さんを受け持っていました。その後、教室に戻って講義を受けます。講義中は、あまりの忙しさに眠たくなってしまう学生もちらほら…。そして、夕方にもＰＭケアを行います。一九時一〇分からは舎監の先生を交えての夕の礼拝、二一時半の消灯まで自習時間という日課でした。しかし、この時間だけでは講義や実習に備えた学習が終わらず、消灯後に部屋の光が漏れないようにドアの下に新聞などを差し込んで、舎監の先生の目をごまかして（盗電といっていました）勉強する学生もいました。インスペクションと呼ばれた各部屋のチェック（整理整頓、ベッドメイキングや清掃状態）を教員と舎監の先生が毎週月曜日に行い、時には厳しいご注意、時にはお褒めの言葉をメモに書かれていました。寮生活での時間厳守・環境整備・個人衛生といったことが看護教育の一環として考えられていたともいえるでしょう。

寮での人間関係について見ていきましょう。先輩たちは後輩の面倒をよく見ました。入寮の日、新入生の勉強机に小花を飾り、ウェルカムメッセージのカードを贈るのは直上階に住む二年生の役割でした。新入生は、初めて見る寮の洋式トイレや片肘机付きの椅子、ベッドにカルチャーショックを受けることもありましたが、そんなときも上級生がフォローをしました。

このような厳しい生活を送っていくうちに、次第に時間の使い方がうまくなり、学業だけではなく、遊ぶ時間もうまく作れるようになりました。寮の門限は一九時半でしたが、あらかじめ届を出しておけば、月二回まで二一時まで門限が延長され、音楽会・演劇などは、二一時三〇分までの外出が認められました。このような寮生活を一緒に送ってきた仲間とは、それこそ苦楽を共にし、同じお釜のご飯を食べた仲間として篤い友情で結ばれ、卒業後もずっと交友関係は続いているようです。

しかし、こうした学生寮も、大学になってから、次第に全寮制への疑問や日常生

学生寮内、洗濯場

学生寮の室内

活の様々な規則に対する不満が大きくなってきました。一九六八年（昭和四三）学生たちは、学生自治会中央委員会の執行委員三名と一～三年の各学年代表二名による「寮問題委員会」を発足させ、その年の年度末に「全寮制度に関する学生自治会の見解」と「全寮制度廃止要求の署名」を大学に提出しました。翌年、この委員会は「寮委員会」と改名され、学科長との間で協議を重ねてきましたが、折り合いはなかなかつきませんでした。一九七〇年（昭和四五）学長の発議によって「寄宿舎委員会」を設け、この中で全寮制度に関する検討をし、同年一二月には全寮制度廃止（四年生のみ通学可）の決定がなされました。そして六年の移行期間を経て、一九七六年（昭和五一）、五十余年に及んだ本学の寮制度は廃止になりました。

〔学内行事〕

＊白楊祭

白楊祭は、学生自治会が主催して行う大学祭です。短大時代は聖路加看大祭と呼ばれ、文化祭委員が中心となって企画し、各クラスからの研究発表や各部活動の発表報告などがありました。一九七七年（昭和五二）に「白楊祭」とネーミングされ、二〇一二年（平成二四）で五二回目を迎えました。各部活動、サークルの発表や外部からの講演を主催するなど、現在もなお学生自治会が主体となって運営を続けています。

白楊祭、お手前が終わって記念撮影の茶道部

＊体育デー

体育デーは、学生がとても楽しみにしている学内行事の一つです。以前、大学での体育の時間は、校舎の地下一階にある狭い体育館で行っていましたが、決して満足できる状況ではありませんでした。一九七六年に学生全員が参加する学年対抗球技試合が行われるようになったのをきっかけに、二年後の一九七八年（昭和五三）からは「体育デー」として、中央区の体育館を一日借り、全学生、教職員が参加する学年対抗競技大会となりました。もっとも学生が熱く燃え、結束力が高まる一日といってもよいでしょう。各学年は決められた色で作ったおそろいのTシャツを着て、体育デーに臨みます。以前、綱引きにおいて、明石小学校から借りた綱が競技中に切れてしまうというアクシデントがあり、その後大学は綱引き用の綱を購入したというエピソードも残っています。体育デーは学生と教職員の委員が運営しており、委員は黒のTシャツを着るという決まりがあります。二〇〇九年（平成二一）、体育デー委員に初めて男子学生が入りました。また、二〇一一年（平成二三）から同窓会より、体育デーに助成金をいただくようになりました。

＊クリスマスの集い

全寮制の時代は、クリスマス礼拝とクリスマス音楽の夕べが必ず行われていまし

体育デーでのひとこま

た。寮生活が廃止されてからこの行事が一時なくなりましたが、一九七五年（昭和五〇）に復活し「クリスマスの集い」として再スタートしました。学生自治会とチャペルアワー委員が中心となって運営しています。クリスマスの集いは二部構成で、一部が礼拝、二部が茶話会と各学年や有志の出し物を行います。教職員も出し物をします。最後には日野原名誉理事長の指揮のもと、ハレルヤコーラスを全員で大合唱して幕をとじます。笑いあり、涙ありの素敵な集いです。

（萱間　真美・大熊　恵子・有富　洋子）

13

聖路加看護大学と聖路加国際病院との関係を教えてください。

病院と大学の創立者、トイスラーは日本の医療には、医師と協力して働くことができるレベルの高い看護婦の養成が必要であると確信し、一九二〇年（大正九）、入学資格を高等女学校卒業とする、修業年限三年の聖路加国際病院付属高等看護婦学校を開校しました。本学のルーツは病院附属の看護婦学校から出発したのです。

当初トイスラーが聖路加病院を設置した際に描いていたのは、単なる病院ではなく、医療・公衆衛生・看護婦養成の大きな三本柱を包括する聖路加メディカルセンター構想でした。聖路加病院での医療と地域の公衆衛生に関する社会的活動、看護婦養成教育を有機的に行うことが病院設立の目的だったのです。一九九六年（平成八）に現在の新校舎が完成するまで病院と大学とは棟続きの建物でした。組織は別でも病院は実習で学生を受け入れる、病院医師が非常勤講師として専門科目の授業を担当するなど、また、ボイラーやエレベーターなど施設設備管理面でも病院の支援はとても大きなものがありました。

戦後制定された学校教育法で、学校法人のみが私立学校を設置できると定められたため「学校法人聖路加看護学園」が設立され、財団法人である病院と学校は異なった法人組織でそれぞれ医療、教育研究を行うこととなりました。一九六四年（昭和三九）大学昇格の際に大学設置基準を満たすためには一定の校地が必要であるということから現在の聖路加ガーデンなどの病院所有地を無償貸与してもらい、そのおかげで大学昇格が実現しました。

また、現在の本学校舎は一九九六年、聖路加再開発事業の中で、独自ではとても建築費を捻出することができなかった大学に対し、聖路加国際病院の絶大な支援を受けて竣工しました。これらのことを勘案すると、聖路加国際病院と聖路加看護大学の共同体意識がなければ大学の今日の発展はなかったといっても過言ではありません。

現在、法人としてはそれぞれ独立した個別の法人ですが、聖路加国際病院と聖路加看護大学とは聖路加コミュニティとして密接な関係を保っています。学校法人聖路加看護学園の役職上の理事として聖路加国際病院の院長が任命され、評議員も病院職員からの選出枠が明記されています。また、反対に病院の理事会や評議員会に本学の学長などが加わっています。さらに、院長、看護部長（副院長）、チャプレンが兼任教授として任命され、教授会メンバーとなっています。病院は主要な実習

場所であり、各診療科の多くの医師・看護師が臨床教員に任命され、教育指導をしています。

他にも大学図書館と病院の医学図書館との相互利用も図られ、学生食堂の給食サービスも大学単独では採算が取れないため、病院の職員食堂に委託しています。また、大学の施設全般を管理する中央監視盤は病院の防犯センターとリンクしており、冷暖房は病院の地下に作られた地域冷暖房システムから供給されているなど施設設備の面においても病院と大学とは緊密な連携が保たれているのです。

（山口　喜義・進藤　務）

14

どのように、短期大学から大学に変わったのですか。

戦後の学制改革では、旧制専門学校の多くは四年制大学となりましたが、中には十分な条件が整わず、新制大学に移行することが困難な学校がありました。そのため、暫定的制度として一九五〇年（昭和二五）から学校教育法の第一条項に相当する短期大学制度が発足しました。

当時の聖路加女子専門学校は、一九四六年（昭和二一）より東京看護教育模範学院の名で日本赤十字女子専門学校との合同教育を行っていましたが、ＧＨＱに建物を接収されており、また校地、運動場などの大学設置条件を満たすことが困難でありました。

看護教育の多くは三年制の各種学校でありましたが、一九五〇年（昭和二五）に聖母女子短期大学と天使厚生短期大学が、日本で最初の看護系短期大学となり、一九五二年（昭和二七）には、看護における日本初の大学教育機関として高知女子大学家政学部看護学科が誕生し、翌一九五三年（昭和二八）には、東京大学医学部

衛生看護学科が設置されました。

本学は、一九五三年（昭和二八）に、ＧＨＱから校舎と病院の一部が返還され、一年生から順に渋谷区宮代町の日赤校舎から明石町に帰り、秋には全員が引き揚げて来ました。

そして一九五四年（昭和二九）四月、聖路加女子専門学校は日本赤十字女子短期大学、京都市立看護短期大学とともに、戦後三番目の看護系短期大学として認可され、新たにスタートすることになりました。

一〇年後の一九六四年（昭和三九）には、聖路加短期大学は聖路加看護大学に改組され、私立大学における日本最初の看護大学の誕生となりました。改組の趣旨は、短期大学三年に加えた一年の専攻科では教育が分断されるため四年間の一貫教育にする、今後の看護教育の発展には大学卒の指導者が必要となる、そして専門職としての勉強を極めるための大学院に進む道を用意する、などでありました。日野原重明、前田アヤ、檜垣マサ、高橋シュンをはじめ、多くの教職員の不断の努力と、聖路加国際病院の多大な協力により、運動場の整備、校地の取得、一般教養担当専任教員の確保など、さまざまな準備が整えられました。そして、日本初の看護系の大学である高知女子大学に遅れること十二年、一九六四年に、私立では日本初の四年制の看護大学になることができました。本学は小規模な学校であったため、戦後の

大学設置基準を満たすことに十年の歳月を要しました。このときの忸怩（じくじ）たる思いが、その後の、私立大学初の看護系大学院修士課程設置（一九八〇）、日本初の看護系大学院博士課程設置（一九八八）へとつながっていきました。

短期大学から大学になって一番変わったことは、短期大学三年間の看護婦の教育と一年間の専攻科で行っていた保健婦・助産婦教育を、四年間の教育に包含して行い、看護婦・保健婦・助産婦（但し、助産婦は選択）の国家試験受験資格が得られるようにしたことでした。短期大学での単位数は一般教育科目二九単位（外国語科目・保健体育科目含む）、専門科目六六単位の合計九五単位で、専攻科は三九単位（一九六二年（昭和三七）度　保健婦教育課程・助産婦教育課程・看護管理等）でしたが、大学では一般教養科目三六単位、外国語科目一六単位、保健体育科目四単位、専門教育科目八一単位の合計一三七単位が卒業要件（一九七三年（昭和四八）度）となり、一般教養科目が大幅に増えました。大学を卒業すると「**衛生看護**学士」が授与されました。また、ガウンを着て卒業式が行われるようになりました。

短期大学・大学では、一年生の秋にキャッピング（Capping. 戴帽（たいぼう）式）がありました。キャッピングは、看護婦になるための誓いを

＊衛生看護
衛生看護学士の「衛生看護」という名称は、いままで日本でいわれてきた看護ではなく、公衆衛生や予防なども含めた、いわゆる総合看護・教育（comprehensive nursing/education）をするという意味合いであった。（金子光著「看護の灯　高くかかげて―金子光回顧録」。医学書院、一九九四、一四五頁）

新たにするために、看護婦のシンボルとされていたキャップを頭に戴く儀式です。その由来は、ヨーロッパで修道女がイバラの冠をかぶって神に仕える誓いを立てたことにあるといわれています。わが国では一九二〇年（大正九）に本学初代主事のセントジョンが行なったのがはじまりといわれています。キャッピングの儀式が終わると、一年生は、それまでのブルーストライプの実習服を濃紺の実習服に替え、気持ちも新たに実習場に出かけました。

しかし一九七〇年（昭和四五）、当時の一年生が「看護学を学ぶために入学している学生に、看護職になるかという意思確認を強制するキャッピングの実施は心外である。」と大学側にキャッピングの廃止を求めました。その結果、翌年の一九七一年（昭和四六）の入学生を最後に五〇余年続いたこの戴帽式は廃止されました。

（佐居　由美・結城　瑛子）

15

大学や大学院の開設時には、どのような困難がありましたか。

看護に大学が必要ですか。

一九六三年（昭和三八）九月三〇日に大学の設置認可を申請した書類の綴りは、一〇センチメートルの厚さです。そこには、九月二〇日に**寄付行為**を改訂し、大学の設置を決議したという理事会および評議員会の議事録、次いで「本学は女性に対し、衛生看護に関する科学的知識および技能を授け、学術を中心とした衛生看護の実践をなし得る指導的な看護専門職業人たるに必要な教育を施すことを目的とする。」という設置目的が記載されています。大学設置については、校地の不足が最大の課題であったようで、その証拠に申請書類には、校地確保にかかわる聖路加国際病院の理事会の記録も挟み込まれていました。

前田アヤと**檜垣マサ**が文部省（当時）に日参し、「そらまた聖路加がやって来た」、と言われるくらいであったと、同僚であった**高橋シュン**は学園ニュース二四三号（二〇〇〇年）に書いています。ガリ版の手書きの書類がほとんどで、書類には○字削除、○字訂正の印があちこちに押されていることからも、ワープロやコピーがなかった時代、申請書の作成は大変な骨折りだったろうと推察できます。

戦後一九五四年（昭和二九）から一〇ヵ年にわたった短期大学から大学への転換は、① 短期大学三年に加えた一年の専攻科は、教育が分断されるので好ましくなく、四年の一貫教育にしたい、② 今後少なくとも我が国の看護教育を短大レベルにするには、大卒の指導者が必要であると、その趣旨が述べられています。また前田は、大学設置の意味を、専門職であればさらに専門の勉強をきわめる道、すなわち大学院へ進める道を作る必要があったと記しています。

一九六四年（昭和三九）一月二五日に設置の認可がおり、橋本寛敏学長のもと、四月に大学一期生が入学しました。この年は、東京オリンピックが開催され、東海道新幹線が開通し、奇しくも東京大学医学部衛生看護学科が保健学科に改組された年でもありました。

看護に修士が必要ですか。

前田は大学設置のときから、大学院を視野に入れていたと推察できますが、一九七四年（昭和四九）、第四代学長に就任した日野原学長（当時）は、その時から大学院を創って日本の看護教育のシステムを発展させたいと考えていたと、語って

＊寄付行為
学校法人のもっとも大切な基礎となる規則。

＊前田アヤ（一九〇〇～二〇〇〇）
一九三〇年（昭和五）聖路加女子専門学校卒、一九三一年（昭和六）研究科修了後終戦後の一時期を除いて一九七五年（昭和五〇）まで母校に奉職。大学設置時、短期大学主事。大学開設と同時に衛生看護学科長。主事・学科長は現在の学部長に当たる。専門は公衆衛生看護学。

＊檜垣マサ（一九二一～一九九四）
一九四三年（昭和一八）興健女子専門学校卒、一九四五年（昭和二〇）～一九九四年（平成六）母校に奉職。大学設置、大学院設置全てに関わる。博士課程設置準備中、学部長兼研究科長。専門は看護史・看護理論。

＊高橋シュン（一九一四～二〇一三）
一九三五年（昭和一〇）聖路加女子専門学校卒、一九五〇年（昭和二五）より一九八一年（昭和五六）母校に奉職。大学院修士課程設置準備中、学部長。修士課程設置と同時に研究科長を兼務。専門は成人看護学。一九九七年（平成九）ナイチンゲール記章受章。本学名誉教授。八四頁参照。

前田アヤ

檜垣マサ

います。一九七九年（昭和五四）の学園ニュース六五号には、大学院構想は過去三ヵ年検討してきたことであり、今年は設置認可をめざすと明言し、翌一九八〇年（昭和五五）三月に認可がおり、四月に修士課程に一期生が入学しました。

大学院開設の準備の中で、文部省の担当官から、看護には単独で修士課程を構成するだけの内容があるかと問われたと、**近藤潤子**（こんどうじゅんこ）（当時教授）は回想し、大学院設置の追い風は、エジプトから吹いたと語っています。既に大学院を持つエジプトから、大学院教育のために教授派遣の依頼を受けた衝撃が、促進剤になったというのです。その頃本学を取材した**高須須美子**氏は、準備を進めていた本学より、千葉大学に一年先を越された、と悔しそうに語るのを聞き、先端を行くものの自負を感じたと記しています。

看護に博士が必要ですか。

修士課程設置の後、日野原学長（当時）のリーダーシップのもとで、博士課程増設へ向けてさまざまな準備がなされました。教員の獲得や若手教員の育成を進め、教育課程の構築に全学で取り組んだ様子が、「聖路加看護大学の七〇年」の五〇～五十四頁に詳細に記録されています。

博士課程の増設では、さらに看護学とは何か、他学問とどこが異なるのかの説明

＊近藤潤子（一九三一～）
当時母性看護学教授。修士課程設置に尽力。現在大使大学理事長。本学名誉教授。

＊高須須美子
聖路加看護大学「人間の理解」めざすパイオニア　朝日ジャーナル　23（46）．1981

が求められました。看護学が独立した学問であることをいかに説明するか、書き直した原稿はダンボール箱数箱になったと、**南裕子**（みなみひろこ）（当時教授）が述べています。

一九八六年（昭和六一）の申請は不備で審議にかかりませんでしたが、一九八七年（昭和六二）一一月に提出した申請書には、「看護学においては、健康問題をその人の日常生活の構造と機能の問題として、健康状態と人間の日常生活、環境との関連の上で捉える。また、看護学では、健康問題を持つ人々がその人々の健康状態を高めるための生活行動をより望ましい状態にしうるように直接的・間接的ケアを行う実践を重視する。」と看護学を説明しています。

日野原学長（当時）は、視察に訪れた設置審議会委員から、どこに研究室（実験室）があるのかと問われ、**ケアの学位には病室と患者は必要だが、実験室はいらない**と説明したと回想し、しかしこれは理解されなかったと、述べています。研究科長への就任が決まっており、審議会委員へ対応した**常葉恵子**（ときわけいこ）（当時教授）は、看護職に対する多様なイメージを持つ人々へ、平易な言葉で**看護学を説明する難しさ**を痛感したと述べています。

大学、大学院修士課程、博士課程と、本学は看護の学としての発展を牽引し、困難な扉を開いてきました。また、看護教育の高等教育化の必要性と、学問としての看護を社会に示し続けて歩んできました。檜垣マサが「**私学として、また単科大学**

＊南裕子（一九四二～）
当時精神看護学教授。博士課程設置に尽力。後に兵庫県立看護大学学長・近大姫路大学学長を歴任。現高知県立大学学長。本学名誉教授。

＊ケアの学位には病室と患者は必要だが、実験室はいらない
日野原重明　時期尚早というならば実験してみて実現する．天野郁夫編．大学を語る22人の学長．玉川大学出版部．186-199．1997

＊常葉恵子（一九二七～二〇〇三）
博士課程開設時学部長兼研究科長。一九九八年（平成一〇）より第四代学長。七二頁参照。

＊看護学を説明する難しさ
常葉恵子．聖路加看護大学博士課程日本で最初のスタート、難しかった“看護学”の説明．看護．45(7)．63-77．1993

＊私学として、また単科大学として幾多の困難はあるが
建学の精神を生かした看護教育．看護．35(14)．13-20．1983

として幾多の困難はあるが、長い歴史のもとに建学の精神によって培われた伝統を失うことなく、不断の努力と前進する気風が本学の根底に流れており、これは顕著な特色としてあげられるのではないかと思う」と語った通り、トイスラーの建学の精神が、脈々と流れていることを感じます。

（菱沼　典子）

16

長く続いた女子教育の中に男子学生が受け入れられるようになったのはなぜですか。

日本で女子に対する高等教育が始まったのは、一八七二年（明治五）に学制が発布されてからのことです。当初、大学に女子が入学する道は閉ざされており、女子が入学できたのは官公立の師範学校でした。一九〇三年（明治三六）専門学校令が公布されると、私立の女子教育機関として専門学校が創られ始めました。大正時代に入ると、女子も大学進学が可能になりましたが、国は女子大学の設置には消極的で、女子は専門学校への進学でよいと考えていたようです。本学の前身、聖路加国際病院付属高等看護婦学校が設立されたのは一九二〇年（大正九）のことで、まさに専門学校の新設が急速に進んだ時期と重なります。本学は良妻賢母を目指す教養教育としてではなく、看護という体系的な知識と技術を身につけた専門職を志向していた点では多くの他校と異なっていたかもしれませんが、まだまだ性別役割観に強く束縛されていた時代に生まれたのです。

昭和時代に入り聖路加女子専門学校となり、第二次世界大戦後、一九五四年（昭

和二九）に短期大学、一九六四年（昭和三九）に大学となった際も、女子教育が貫かれました。

一九八六年（昭和六一）の男女雇用機会均等法の施行をきっかけに日本の女子大学の共学化が徐々に進み始めました。こうした動きに押される気配があったのか、本学の女子教育に対する変化の兆しを一九九三年（平成五）の大学新校舎建築計画にみることができます。新校舎は、五〇年間使用していくと考えて、設備を整えておく方がよいと、各階に男子トイレが設置されました。ただし、建学の精神の一つの柱である女子教育を将来どうするかは、この設備とは別の問題として議論すべきであるとされました。しかし、この建築計画の中に、将来男子を受け入れる可能性を大学が視野に入れ始めたことをみてとることができます（一九九三年九月二四日理事会議事録）。

一九九四年（平成六）の理事会から、大学の将来構想の一つとして、共学化の議論が本格化しました。看護専門指導者の育成のためには大学院の充実が必須であり、大学院入学における性差別を取り払い、他の看護系大学を卒業した男子を受け入れ、ゆくゆくは学部においても男子を受け入れるようにすべきであるとの問題提起がなされたのです（一九九四年九月二二日理事会および評議員会議事録）。すでに科目等履修生、研究生などで男子を受け入れられるかという問い合わせがあり、大学としても検討せざるを得ない状況にありました。聖路加看護大学は女子の看護婦教育を続けることが使命である、男子を受け入れることで女子の就学の機会が減る懸念がある、共学化は時代の流れである、男子が入ることで教育の多様化が計られるなど、賛否両論、意見が交わされた結果、一九九五年（平成七）、男子を科目等履修生、研究生として受け入れること、また、学則の検討を行って大学院に受け入れていくことが決定しました（一九九五年五月二六日理事会議事録）。大学院については学則上、問題はないとのことで同年、受け入れ可能との判断が下されましたが、しばらく積極的な広報は行われることなく、実際に大学院に男子学生が入学したのは二〇〇〇年（平成一二）度からのことでした。学部については、学則第一条の「女子に対し…」という文言を削除する必要があり、一九九九年（平成一一）の教授会の議を経て、二〇〇〇年の理事会で改正が承認されました。こうして聖路加看護大学の女子教育の歴史の幕は下ろされ、二〇〇一年（平成一三）度から学部にも男子学生を迎えたのです。

すなわち、職業や雇用における機会を前に男女の平等は保障されるべきという社会の流れを背景に、看護学という学究の場においても、むしろ差別されてきた男性に門戸を開くことによって、より高度な看護の専門性を追求する姿勢を具現したいとの考えから、男子を受け入れたのです。

男子学生の受入れ

入学を受け入れた結果、二〇一二年（平成二四）度までの十二年間の入学者数は、三十九名（学士編入生を含む）となり、すでに三十名が学窓を巣立っていきました。さらにキャリアアップをめざして進学した人、看護師として病院に勤務する人、保健師として自治体で働く人、それぞれの目標のもと、たゆまぬ歩みを続け、活躍しています。

（森 明子）

17

聖路加看護大学の学長はどのようにして選ばれるのですか。また、歴代の学長（校長）はどのような方でしたか。

私立学校法で学校法人の業務の決定機関は理事会であると定められています。この法律に基づき理事会の承認を経て、理事長により学長が任命されます。学長候補者の選考プロセスは、理事会のもとに理事長またはこれを代理する者、学校法人代表三名（理事会互選、内一名は評議員より選任）大学教員代表三名（教授会互選二名、研究科委員会互選一名）の七名による「学長推薦委員会」を設置し、学外者も対象に広い範囲から学長候補者の検討が行われます。理事会は、推薦された候補者から直接大学の課題、将来構想、所信などを聴き、キリスト教精神尊重を確認したうえで選任されます。

聖路加国際病院付属高等看護婦学校から始まった本学は、聖路加女子専門学校、聖路加短期大学、聖路加看護大学へと創立以来約九〇余年の年月を経て移行しましたが、歴代の学長（校長）を振り返ると、ホワイト学長を除き初期には歴代の病院長が就任しました。トイスラー・久保徳太郎・橋本寛敏の各院長です。初代の聖路

加国際病院付属高等看護婦学校校長は、学校が病院内組織のため、トイスラー院長が兼任し、実質的な責任者は、セントジョンでした。トイスラーはドイツ人の父親を持つキリスト教宣教医でした。身長一八〇センチほどの長身でピンホールのシャツを着た写真通りハンサムな方でした。若い頃の性格は激しやすく短気な熱血漢は父親譲りといわれ、いったん目標を定めたら一途に邁進するタイプで、築地病院とよばれた時代から病院建築の募金活動をアメリカ各地で精力的に行い、集めた資金で聖路加を建築するなど現在の聖路加国際病院の基礎を築きました。

本学の講堂にその名が残されているセントジョンは、日本のナースの品性を高め、高等教育を施すためにトイスラーが米国から招聘した方で何事にも積極的で厳格すぎるとまでいわれた教育者でした。荒木いよ婦長と結婚した**久保徳太郎**校長はトイスラー逝去の後を継いで看護教育に尽力し、聖路加礼拝堂の竣工を行いました。

第三代校長は、一九四〇年（昭和一五）より**橋本寛敏**院長です。橋本の就任時代は、日本が日中戦争から太平洋戦争へと突入し、チャペルの十字架は軍部の命令により搭上より取下ろされ、聖路加国際病院の名称は大東亜中央病院、本学も興健女子専門学校と改称させられて国を挙げて戦争協力を強制させられた大変な時代でした。そして終戦後のＧＨＱによる校舎の接収や日本赤十字社救護看護婦養成部との合同教育の問題が落ち着いたところで、一九四八年（昭和二三）、**サラ・Ｇ・ホワイト**

久保徳太郎

＊久保徳太郎（一八七四～一九四二）
東京帝国大学医学部卒業。一九〇三年（明治三六）より聖路加国際病院勤務。一九三四～一九四〇年（昭和九～一五）、第二代校長。

橋本寛敏

＊橋本寛敏（一八九〇～一九七四）
東京帝国大学医学部卒業。一九二五年（大正一四）より聖路加国際病院勤務。戦前の女子専門学校時代から短期大学を経て大学設置後まで、第三代校長・第二代学長を務める。同時期、聖路加国際病院院長。

（Sarah.G.White）が再来日し、第四代校長に就任しました。戦後の教育改革により一九五三年（昭和二八）学校法人聖路加看護学園設立、続く一九五四年（昭和二九）短期大学が認可され、専門学校を引き継ぐ形でホワイト校長が短期大学学長に就任しました。ホワイト学長が定年退職した後、再び橋本が就任し、一九六四年（昭和三九）四年制の看護大学が認可されました。大学昇格後の学長は橋本寛敏から一九七四年（昭和四九）に**日野原重明**に引き継がれました。日野原学長（現名誉理事長）の強力なリーダーシップのもと、私学で初めての看護学大学院修士課程、さらに日本で初めての大学院博士課程が増設されました。一九九〇年代に入ると、少子高齢化社会に向かって国及び職能団体による一県一看護大学構想が打ち出され、全国各地に設立された看護系大学に看護出身の学長が次々に誕生するようになりました。この影響で本学でも医師ではない看護出身の学長をという強い要望が出されて一九九八年（平成一〇）**常葉恵子**が学長に選出されました。常葉は、新校舎建設、二号館取得、二一世紀ＣＯＥ採択、看護実践開発研究センターの発足に尽力されましたが、在任中の二〇〇三年（平成一五）ハワイにおいて水難事故に遭い急逝、学内は深い悲しみに包まれました。

現・**井部俊子**学長は、二〇〇三年四月に第五代学長として就任しました。聖路加国際病院看護部長を経験し、前日本看護系大学協議会会長、元日本看護協会副会長

サラ・Ｇ・ホワイト

＊サラ・Ｇ・ホワイト（一八九一～一九七二）
一九三二～一九四〇年（昭和六～一五）聖路加女子専門学校教務主任。一九四八～一九五七年（昭和二三～三二）、本学第四代校長、初代学長。

日野原重明

＊日野原重明（一九一一～）
一九三七年（昭和一二）京都帝国大学卒業。一九四一年（昭和一六）より聖路加国際病院勤務。一九七四～一九九八年（昭和四九～平成一〇）、聖路加看護大学第二代学長。現在名誉学長および聖路加看護学園名誉理事長。

でもあります。また、文部科学省、厚生労働省等の委員を歴任し、日本の看護界のリーダーとして活躍しています。

（山口　喜義）

常葉恵子

＊常葉恵子（一九二七～二〇〇三）一九四七年（昭和二二）聖路加女子専門学校厚生科卒、一九四八年研究科修了。聖路加国際病院、愛知県立看護短期大学教授を経て一九七三年（昭和四八）より聖路加看護大学教授、一九九八年に第四代学長。

＊井部俊子（一九四七～）一九六九年（昭和四四）聖路加女子大学卒、一九八二年（昭和五七）同修士課程修了、二〇〇一（平成一三）同博士課程修了。

18 WHOコラボレーティングセンターとはどのような役割・機能をもつセンターですか

WHOコラボレーティングセンターは、WHO指定研究協力センターと呼ばれ、日本政府の了解のもと、WHO（世界保健機関（World Health Organization））が指定している研究領域において協力する施設です。四年を任期とし、最終年度に指定された研究領域の活動成果を見直して、再任命されます。

聖路加看護大学のWHOコラボレーティングセンターは、プライマリ・ヘルス・ケア看護開発協力センターと称し、一九九〇年（平成二）に、WHOから任命されました。

日本にこのセンターが出来た背景には、人々の健康増進に格差が広がり新たな健康課題が浮上し、看護・助産職の力が必要になったことがありました。一九四八年（昭和二三）にWHO憲章が採択され、WHOが正式に発足し、加盟国の健康の推進の技術援助を進めてきました。その後、一九七八年（昭和五三）に採択されたアルマ・アタ宣言の中で、開発途上国向けの健康創造のための保健活動を明確にし、

WHOコラボレーティングセンターの位置づけ

プライマリ・ヘルス・ケアの進め方が示されました。さらに、一九八六年（昭和六一）に、ヘルスプロモーションに関するオタワ憲章が採択され、先進国向けの健康増進の戦略を明確にして、各加盟国は健康増進を展開してきました。そのような折、国民の健康状態が改善された国と改善が思うように進まない国の健康格差が明確となりつつありました。その解決にはプライマリ・ヘルス・ケアをさらに推進することが重要であり、そのために、看護・助産を強化する必要がありました。西太平洋地区においても、コラボレーティングセンターを増やすために、日本にも呼びかけがあり、プライマリ・ヘルス・ケア看護開発センターが組織され任命を受けました。

日本における看護・助産強化の目標を達成するために、任命された時のセンター体制は、聖路加看護大学を事務局として、千葉大学看護学部、東京大学医学部保健学科看護学講座、国立公衆衛生院看護学部（当時）の四施設の協働体制でした。すなわちプイマリ・ヘルス・ケア看護コラボレーティングセンターが指定されたのです。

その後、各施設の事情とコラボレーティングセンターの任命条件の改正で、第四期の二〇〇三年（平成一五）からは、聖路加看護大学単独で活動するようになりました。二〇一二年（平成二四）四月には再任命され、第六期からは、これまでの看護学部から看護実践開発研究センターがＷＨＯの看護開発協力センターとして活動

することになりました。

第六期からの新体制は、看護実践開発研究センター長が看護開発協力センター長を兼任し、研究センター研究員およびＰＣＣ（People-Centered Care）部門責任者が事務局を形成し活動しています。

聖路加看護大学のＷＨＯ看護開発センターの目標は、プライマリ・ヘルス・ケアの価値に基づいた西太平洋地区と東南アジア地区で二〇〇八年（平成二〇）に採択したポリシーフレームワークであるPeople-Centered Health Care（人々が中心のヘルスケア）を促進するための教育・実践・研究を、国内・国際の研究・教育機関と連携して推進することです。二〇一二年から始まった第六期の活動目標（Terms of Reference）には、次に掲げる四つがあります。

一、People-Centered Health Care の看護モデルをプライマリ・ヘルス・ケアの価値に基づいて、評価し改善をしてゆき、ミレニアム開発目標の達成と、少子高齢社会での健康生成に貢献する。

二、People-Centered Careにおける看護のリーダーシップを発揮することにより、協働する保健人材の力を最大限の活用と能力開発、および学際的上級実践者の教育と、実際のサービス提供によりＷＨＯの目標の達成に貢献する。

三、プライマリ・ヘルス・ケアにおける看護・助産教育と上級実践の推進のため

の研究とシステムの改善によりＷＨＯの活動を支援する。

四、グローバルな地域を超えて、グローバルパートナーとの協働により、ミレニアム開発目標の中の母子保健のさらなる改善に貢献する。

具体的には、「People-Centered Health Care」に沿った、一般市民・女性・家族・高齢者・世代間交流等の健康リテラシーの向上と健康に関する行動の意思決定の能力を、いかに当事者と専門職が協働して健康なコミュニティーを形成できるかを研究課題とする看護実践開発研究を進めています。加えて、世界の看護・助産コラボレーティングセンターとのネットワークの中で、開発途上国の看護・助産の量的・質的改善に寄与できる研究活動を進めています。二〇一一年（平成二三）四月からアジア・アフリカ助産研究センターが設立され、現在、タンザニア、ムヒンビリ健康科学大学と共同で、タンザニアでの助産学大学院修士課程の設立、および助産師継続教育プログラムを実施しています。加えて、インドネシアのイスラム大学保健・医科学学部の看護学科と共同で、インドネシアの看護・助産強化の課題を探索し、「予防・健康増進転換」のための地域看護活動開発にむけ研究が進んでいます。また、海外からの看護・助産のリーダーたちの研修に協力をしています。

（田代 順子）

19

聖路加看護大学では「二一世紀ＣＯＥプログラム」という大型研究費を得て看護学の分野では最先端の研究を行なったとききました。詳しく教えてください。

文部科学省は、二〇〇一年（平成一三）度にまとめた「大学の構造改革の方針」のなかで、「評価に基づく競争原理の徹底」を改革の方向性の一番に掲げました。それは世界最高水準の大学を、国立、公立、私立問わず作り上げていくという目標のもと、すぐれた取り組みを行なう大学に重点的に国として投資するという計画です。

二一世紀ＣＯＥプログラムはこうした背景から、二〇〇二年（平成一四）度から開始された事業です。ＣＯＥはCenter of Exellenceの頭文字をとったもので、すぐれた研究拠点であるという意味です。競争原理を取り入れるということですから、聖路加看護大学が二一世紀ＣＯＥプログラムの拠点として採択された二〇〇三年（平成一五）度では、二五五大学が六一一の事業を申請し、厳正なる評価により、五六大学一三三拠点が採択され、三三四億円の予算がつきました。聖路加看護大学は「市民主導型の健康生成をめざす看護形成拠点」という課題名で、医学系の一つ

として採択され、この年、千葉大学と兵庫県立看護大学（当時）も看護系大学として同時に採択されています。

二〇〇三年度は、聖路加看護大学は新たに二号館を取得し、看護実践開発研究センター（以下、研究センター）を位置づけました。そしてその研究センターがＣＯＥプログラムの拠点となり、多くの関連事業と多くの研究者が二号館を活用することになったのです。

本学での取り組みは、井部俊子学長の強いリーダーシップのもと、拠点リーダーである小松浩子（当時教授）が推進役となり、次の三つについて探求されていきました。

1．市民の視点から良質で実用性のある看護サービスを生成すること
2．それが実質的な健康管理者である市民の手に届くよう健康情報コンテンツやe-learningとして世界的規模で発信すること
3．看護サービスの消費者である市民の視点からその質が評価され、政策提言や新たな研究課題につなげられること

ここでいう「市民」とは、一般市民のことであり、人々をさします。健康を作り上げていくのは医療者ではなく、まさに人々そのものであると捉え、その人々がよりよい健康情報を獲得したり、その情報を活用するためにアクションを起こしたりすることを推進するのが医療者の位置づけであるといった関係性を重視し、People-Centerd Care(ＰＣＣ)を新しい看護学の概念であるとしさまざまな活動が展開されました。

このように、市民と看護職のパートナーシップを重視しながら展開されたプロジェクトは、「日本型遺伝看護の創生と普及」「日本型がん看護」「日本型高齢者ケア」「女性中心のケア」「不妊女性へのWomen-Centered Careモデルの開発」「地域緩和ケア（在宅ホスピスケア）」「子どもと家族中心のケア」「日本人の国民性に相応した効果的な健康教育実践プログラムの研究開発と実践」「全ての人々への健康（Health for All）」へ貢献できる国際コラボレーション実践モデル開発」「健康資源コンテンツデジタル化とe-learning開発」「市民主導型看護サービスの活用と評価」「自分のからだを知ろう」キャラバン」「市民主導型ケア提供方略開発プロセスで体験されるメンタルヘルス上の問題に関連した援助の困難性の認識」「大学で開設する市民への健康情報サービス」があり、**研究成果**として報告されています。

これらのプロジェクトから、ＰＣＣの対象者は、「病とともに生きる人々」「社会構造のひずみで生きる人々」「先端医療で葛藤する人々」「将来の健康への備えを求める人々」の４つに分類されることが分かったと報告しています。また、看護職は市民と言葉の壁や、組織の壁を越えて分かり合うために多くの場と機会を共有しま

「からだを知ろうキャラバン」活動

＊研究成果
聖路加看護大学二一世紀ＣＯＥプログラム（二〇〇八）研究成果最終報告書

した。そして対等な立場となり、医療システムや地域づくりのビジョンを語り合い、それを実現するための資源や組織作りが始められたのだというプロセスが示されています。「共に生み出し活用するケアシステム」作りの実践を共有するなかで、関わっている人々は、新たな役割や能力を獲得していくのだといっています。そして多くの人々がそれに参加してプロジェクトが成長し、そして地域全体が新たな健康生成をめざす機能を獲得するのだということが取り組み全体で共有されたのです。

二一世紀ＣＯＥプログラムの五年間に関わった人々の延べ人数は、研究職五二六名、医療従事者五六名、行政職二七名、学生一〇二名、市民ボランティア六三名、総勢七七四名にのぼります。またＣＯＥの予算において本学大学院生を対象とした研究助成金を設ける等の若手研究支援を行い、五年間で三九名の博士号取得者を輩出しました。

二一世紀ＣＯＥプログラムは五年後の二〇〇八年（平成二〇）度に終了したわけですが、この五年間で育てられた多くのプロジェクトは今も成長しながら看護実践開発研究センターで継続されています。「聖路加健康ナビスポットるかなび」や「看護ネット」などがその代表です。駅伝シンポジウムで作られたシンボルキルトは今も二号館で輝いています。

二一世紀ＣＯＥプログラムで生み出されたＰＣＣの心は、これからの聖路加看護大学の教育、研究、実践に深く影響していくことになるでしょう。

（山田 雅子）

20

聖路加の卒業生でナイチンゲール記章を受賞した人がいますか。その方達のことを教えて下さい。

看護界における世界最高の栄誉、フローレンス・ナイチンゲール記章を受賞した卒業生は、湯槇ます、高橋シュン、永井敏枝（ながいとしえ）の三名です。

受章資格は、平時または戦時において、傷病者、障害者、紛争や災害の犠牲者に対して、献身的な活動や創造的・先駆的な貢献をした看護師等で、一九九三年（平成五）からは、男性、さらに公衆衛生と看護教育分野における貢献も受賞対象に追加されました。

この記章は鍍銀（めっきぎん）で作製されアーモンド型をしています。記章表面には燭台を手にしたナイチンゲールの像と「一八二〇～一九一〇年　F・ナイチンゲール女史記念」の文字があり、裏面はラテン語で「博愛の功徳を顕揚し、これを永遠に世界に伝える」と刻まれています。三名の方々の受賞理由を紹介します。

湯槇ます（一九七七年（昭和五二）　第二六回受賞）

一九二四年（大正一三）、聖路加国際病院付属高等看護婦学校に入学、卒業後、同病院に勤務し、優れた才能と訓練された技術を発揮し、外国人傷病者の看護に貢献した。一九二七年（昭和二）、ロックフェラー財団奨学生として留学し、外科看護、麻酔学を学び、帰国後は、看護を学問的に理論づける努力をし、東京空襲の際は、多数の傷病者看護の陣頭指揮をした。戦後、東京看護教育模範学院の教育主事としての重責を担う他、わが国の看護教育の在り方、看護組織の確立、公衆衛生看護の体系化等、看護の水準向上に努力した。一九五四年（昭和二九）日本初の大学制度による東京大学医学部衛生看護学科に就任し、翌年、国立大学初の看護師出身の教授となり、看護大学教育の先駆者として偉才を発揮した。（この時の苦悩は、「グロウイング・ペイン『拓けゆく看護のなかで』日本看護協会出版会、一九八八年」の中で述べている。）また、ナイチンゲールの実像と業績をわが国に普及した功績も高く評価された。

湯槇ます

高橋シュン（一九九七年（平成九）　第三六回受賞）

一九三五年（昭和一〇）聖路加女子専門学校卒業後、聖路加国際病院に勤務。一九四三年（昭和一八）フィリピンマニラ聖路加病院副総師長兼看護取締として派遣され、敗戦後現地でアメリカ軍の捕虜となり、一七四**兵站病院**（へいたん）で日本人捕虜の看護にあたった。戦後アメリカに留学後、一九五〇年（昭和二五）より東京看護教育模範学院で新しい看護学と教育法を実践し、戦後の看護学教育の基礎を築いた。聖路加看護大学発展の歴史と共に歩み、大学院初代看護学研究科長を歴任し、看護学教育の質向上に貢献した。この間、厚生労働省、文部科学省および日本看護協会等の各委員として、看護制度の確立と看護学の体系化、看護教育カリキュラムの充実・強化等に寄与した。ベットサイドで、科学的根拠に基づいた看護実践の模範を示す中で聖路加看護大学の中核となる愛の精神、看護の本質、使命等を教授した熱心なキリスト教信徒でもある。

皇后陛下おことばでは「高橋さんが看護に注がれた真摯な情熱と、病み苦しむ人々に寄せられた深い慈しみの心が、どうかこれからも広く看護の世界に受けつがれ、傷病者一人一人が、かけがえのない人生を生きぬく上の支えとなることを願います。」と述べられた。

高橋シュン

＊兵站病院
戦場の後方にあって、負傷兵等の治療・看護にあたる病院。

＊皇后陛下おことば
皇后陛下は日本赤十字社名誉総裁を務められ、ナイチンゲール記章授与式では受章者に直接記章を授与され、おことばを述べられる。

永井敏枝（二〇〇三年（平成一五）　第三九回受賞）

一九四四年（昭和一九）興健女子専門学校卒業後、事業所保健師、高等学校教諭を経て、一九四九年（昭和二四）東京鉄道病院甲種看護婦養成所開設準備から三〇年間、教務主任、教頭を歴任。情操教育を重視し、創造性や感情豊かな教育は、看護師育成のモデルとなった。理論に則った看護実践の必要性から、一九五七年（昭和三二）我が国唯一無二の教科書といわれた「看護原理」を著した。一九五八年（昭和三三）中央鉄道学園で幹部看護師の教育を開始し、日本における継続教育の画期的・先駆的な取り組みによって看護の質向上に貢献した。その後、北里大学看護学部等で看護大学教育の基礎を築き、看護教育の発展に寄与した。この間、厚生労働省、文部科学省等の各委員を歴任、看護行政の中心的な役割を果たし、看護制度改革、国家試験制度の改正等に寄与した。

皇后陛下は、永井および同時に受賞された二名に対し「苦しむ人々への思いやりと共に、優れた洞察力と見識を持つ皆様方の教育を受け、今日、多くの教え子が看護の様々な分野で活躍されていることを、心強く思います。」と述べられた。

（岩井 郁子）

永井敏枝

21

聖路加の卒業生には、開発途上国における看護活動をした人が多いと聞いていますが、どんな活動をしているのでしょうか。

聖路加女子専門学校、短期大学そして現在の看護大学・大学院の卒業生・修了生が、一九六〇年代から今日まで、開発途上国において看護・助産職の育成や、病院における看護力の向上や母子センターをベースにしたプライマリ・ヘルス・ケアのシステムづくり等の領域で働いてきました。これらの卒業生・修了生の多くは、日本聖公会等の教会組織、日本キリスト教海外医療協力会（Japan Overseas Christian Medical Cooperative Service（JOCS））や、その他の非政府援助機関、日本国際協力機構（Japan International Cooperation Agency(JICA)）で働いています。全ての卒業生の看護活動を紹介することはできませんが、一年以上の長期に渡って活動した卒業生とその活動を、いくつかご紹介します。

キリスト教系海外医療協力での看護活動

キリスト教系の団体による活動は、個々の病院や地域での求めに応じて必要な人材を派遣する形態が主のため、臨床現場に身を置く支援が多く見られます。

一．立山恭子（一九六三年専攻科卒）は、一九六五年（昭和四〇）から三年間、日本聖公会北関東教区から親愛修女会の三人のシスターとともに、当時の東パキスタン、バリサール市、オックスフォードミッションが運営している聖アン病院に派遣され、看護・准助産師の養成と産院の運営指導にあたりました。その後、東パキスタンはバングラデシュとして独立しましたが、その混乱期の一九七二年（昭和四七）、イギリス人シスター達が帰国した後の聖アン病院で六ヶ月の協力もしています。

二．次の四名は、日本キリスト教海外医療協力会のワーカーとして派遣されています。和田（現　石井）光子（一九六七年専攻科卒）は、一九六九年（昭和四四）から二年間、南インド、オダンチャトラムのクリスチャン・フェロウ・ホスピタル（Christican Fellow Hospital）で助産師として活動、帰国途中のネパールでも短期の奉仕をしました。金田（現　斎藤）洋子（一九六八年卒）は一九七六年（昭和五一）から一九八一年（昭和五六）、バングラデシュ・キリスト教協議会の保健プログラムに派遣され、バリサール県とフォリドプール県に散在する母子クリニックのフィールド・スーパーバイザーとして、全戸訪問を現地スタッフと実施し、その指導もしました。川口恭子（一九八二

年卒）は、一九八二年（昭和五七）から三期にわたって金田が働いていた同じ地域で、ゴルノディカトリック教会が始めた村づくり、人づくりプログラムにヘルスアドバイザーとして迎えられ、村人の組合活動に結核対策や小児健診等を組み入れ、定着させるシステムづくりに尽力しました。その後、これらの経験をいかしてJOCSのバングラデシュ・ダッカハウスを拠点にアジア地区のワーカーのアドバイザーとして働きました。清水（現Magafu）範子（二〇〇七年修士課程修了）は、国際看護学の修士課程修了直後に、タンザニア、タボラ大司教区保健部門が管轄する村のプライマリヘルスセンターを中心に母子保健計画をスタッフとともに立案しプログラムを展開しました。

三．三上（現　白浜）喜恵子（一九八二年卒）は、インマニュエル綜合伝道団からアフリカ、ケニヤ、ケヌエック病院に派遣され、病棟看護師として活動しました。

独立行政法人国際協力機構の海外医療協力での看護活動

国際協力機構の医療協力活動は、技術協力要請をした国の政府と話し合いで決まる協力です。一九七〇～八〇年代は国レベルの看護教育システムや医療環境の充実に関わる活動が行われました。

一．インドネシア看護教育プロジェクト（一九七八年（昭和五三）～一九八二年（昭和五八））　永野貞（一九三二年卒）、藤門政子（一九三七年卒）がチームリーダーを務めました。看護教育開発センターを拠点としてそのセンター管理や養成学校の教員の協働者として活動しました。

二．タイ看護教育プロジェクト（一九八〇年（昭和五五）～一九八七（昭和六二））　日比野路子（一九四一年卒）、津島優子（一九七〇年卒）が保健省看護教育課を拠点に保健省看護教育行政官と協力してタイの看護教育開発活動をしました。具体的には、現地の看護学校を訪問して教育内容改善提案するなどの制度改革や、日本から供給されたAV機材等でスタジオや地域の現場での教材作成を行い、教員の研修などの技術協力を行いました。

三．パキスタン看護教育プロジェクト（一九八七年（昭和六二）～一九九〇（平成二年））　田代順子（一九七二年卒）、山本あい子（一九七五年卒、一九八二年修士課程修了）が、医科学研究所・看護大学で看護教員とカリキュラム開発や教育方法を開発しました。

四．カイロ大学看護学部プロジェクト（一九九四年―一九九九年）　立山恭子がチーフアドバイザーとしてプロジェクト運営に当たり、教員研修及び臨床看

護実習指導強化プログラムを実施しました。

各国の基本的な看護教育体制が整備されていくにつれ、次なる段階として教員の質向上や看護師のスキルアップを目指す卒後教育の充実といった支援が行われました。

一．エルサルヴァドルの看護教育強化プロジェクト　森山ますみ（二〇〇八年修士課程修了）が二〇〇〇年から二年間、厚生福祉省看護課を拠点に、看護課および養成機関の看護行政官や養成機関の看護教師の力量を高める活動をしました。

二．ケニヤ医療技術強化プロジェクト　成瀬和子（二〇〇九年博士後期課程修了）は、看護教育専門家として二〇〇一年（平成一三）から二年間、ケニヤ国医療技術訓練学校の教員の教育能力の改善のために活動し、続いてスリランカの看護教育行政におけるアドバイザーとして保健省看護課を拠点に看護人材の質向上のために貢献しました。

三．スーダン母子保健強化プロジェクト（二〇〇八～二〇一四）　永野純子（二〇〇四年卒）が村落助産師の継続教育活動において、スタッフの派遣から活動内容の方針決定などの全体マネジメントを行いました。

一方で看護の実践の場における環境整備支援なども、大規模病院における体制整備から、地域の保健所レベルまで、様々な内容の活動が行われています。日本国内から現地の活動についてマネジメントするという形での働き方もあります。

一．エジプト、カイロ大学小児病院プロジェクト一期（一九八三―一九八八年）プロジェクトリーダー立山恭子のもと、渡辺薫（一九八〇年卒）、赤松（現山崎）美保（一九七九年卒）、小野正子（一九七六年卒）、野田（現　熊田）洋子（一九七一年卒、二〇〇二年博士課程修了）が小児看護の質向上のために活躍しました。

二．ブラジルでの母子保健「光のプロジェクト」（一九九六―二〇〇一）　吉野八重（一九九七年卒）および毛利多恵子（一九八二年卒、一九九四年修士課程修了）が派遣され、人間的な出産に対する医療者の意識改革を働きかけると同時に助産師の技術向上や住民に対する母子保健教育などの活動を行いました。

三．阿川牧（二〇〇二年卒）は、二〇〇九年から三年間、国際協力機構の人間開発部、保健人材課においてカンボジア、ラオス、バヌアツ、ブータン、パキスタン、アフガニスタン等のアジア各国の看護・助産プロジェクトや保健人材育成プロジェクト等のマネジメントに従事しました。日本国内において現

地からの研修生受け入れ、また調査等の現地派遣、会議準備要員としてWHOへの出向もしました。

四、ボリビアでの農村部母子保健の地域保健ネットワーク強化プロジェクト

高橋規子（たかはしのりこ）（二〇〇九年修士課程修了）が二〇一一年に派遣され、住民参加型保健活動を取り仕切り、プロジェクト全体の業務調整役を担いました。

その他、多くの卒業生・修了生が、国際協力機構の青年海外協力隊として、保健師隊員、助産師隊員、そして、看護師隊員として、さまざまな開発途上国の施設に派遣され、ボランティア活動をしています。また、これらの開発途上国での経験をもとに、さらにより良い協力ができる様に大学院で国際看護学を学び、健康課題の研究をして、その研究情報をそれらの国に還元する働き方もしています。

（田代 順子、渡部 尚子）

聖路加同窓会はどんな活動をしていますか。

聖路加同窓会は、聖路加看護大学の建学の精神を継承し、会員相互の親睦と啓発をはかり、母校の発展の推進力となることによって社会に貢献することを目的としています。設立年は一九二三年（大正一二）、事務局は大学内に設置されています。

二〇一二年（平成二四）現在、会員は約三五〇〇名います。同窓会は、年代を超えた、また地域を超えたソーシャルサポートとしてのネットワークをもち、同窓生が看護職者として社会的な役割を果たしていくことを支援するという重要な役割を与えられています。

同窓会の事業には、次にあげるようなものがあります。

同窓会会員のための活動

同窓会は、会員のための活動として、会員の動向や互いの情報交換ができるよう、会員名簿の作成や「同窓会だより」の発刊をおこなっています。「同窓会だより」は、

年二回発行する会報誌で、二〇一二年度末で一三一号となりました。同窓会総会の概要や講演会の報告、支部活動報告、同窓生の活躍、大学の近況など、同窓生と母校についての様子を会員に伝えることができるように作成しています。また二〇〇六年（平成一八）には、同窓会のホームページを開設し、会員に役立つ情報を随時、知らせています。

会員の教養と専門的技能を向上させるための活動は一九三八年（昭和一三）に始まりました。その後、戦中・戦後の混乱による空白期間がありましたが、一九五二年（昭和二七）には教育委員会を立ち上げ、今日まで多くの講座を開催しています。

多くの同窓生が、保健・医療・福祉や学校保健など、社会の様々な領域・分野で第一人者として活躍しているというのが、聖路加同窓会の大きな財産です。また同窓会支部の設立にも積極的に働きかけており、同窓会の活動を通して、情報交換や意見交換ができる機会も拡がっています。同窓会は、同窓生が希望する活動の実現を目指しています。

母校のための活動

同窓会では、母校のための活動として、「大学史編纂等基金」や「大学施設設備充実基金」「教育研究振興資金」等への協力をおこなっています。また、白楊祭広告費や体育デー助成金によって、これらの活動をサポートしています。白楊祭では、毎年ブースを設け、同窓会活動や、同窓生にまつわる資料などを展示しています。

新しい事業として二〇〇八年（平成二〇）度より「聖路加同窓会奨学金」、また二〇一一年（平成二三）より「東日本大震災支援事業」を設け、被災された同窓生への見舞金や、ボランティア活動に従事する学生の交通費等を支援しています。同窓会は同窓生が納入する会費で運営されています。クラスごとの活動は、どの卒業年度も活発にしていることと思います。そのクラスの活動の輪を広げていくことで、卒業生・修了生全体で運営する聖路加同窓会の活動は充実し、母校の発展を支えることができるのです。聖路加看護大学の歩みは、日本の看護の歩みでもあります。今後の母校の輝かしい未来のための活動を同窓会は目指して行きたいと考えています。

（柳橋 礼子・宮本 昭子）

23

聖ルカ礼拝堂はどのようなところですか。

聖ルカ礼拝堂は、聖路加国際病院と聖路加看護大学の中心にあり、キリスト教の中でも英国国教会の流れを汲む、カトリックとプロテスタントの中間に位置する日本聖公会に属します。姉妹教会である米国の聖公会や一般市民からの精神的、財政的な援助、そして信徒の熱心な祈りにより一九三五年（昭和一〇）八月着工、翌年一一月に竣工、一二月に**聖別**され、礼拝などに使用される事となりました。

米国聖公会から宣教医師として来日したトイスラーは「チャペルは本院のハート（心臓）である」と常日頃語っていましたが、完成を見ずして逝去しました。その建設は病院本体と同様に細心の注意を払って計画され、近代ゴシック様式によるデザインは、トイスラーの意向通りの宗教建築らしい荘厳さと威容を誇っています。単に身体だけではない精神面を含んだ全人的な癒しが医療に求められている中で、キリストの存在を指し示す礼拝堂がこの病院に必要だったのです。

旧病院三階から六階までの各階から、バルコニー越しに礼拝を可能にしている多

＊聖別
神聖な用に当てるため、特別な儀式によって建物などをきよめ、世俗的使用から引離して別にすること。

層会衆席は独特のもので、入院患者は各階から直に礼拝に参加することができました。一九九二年（平成四）に隣の区画に新病院が建てられてからも、ブリッジを渡って礼拝堂に来る患者も少なからずいます。新病院二階にトイスラーを記念してトイスラーホールが作られ、ここでも毎朝の礼拝が行われ、病院の医師・看護師・職員・ボランティア、患者のため、また看護大学の教職員・学生のために、特にそれぞれの誕生日を覚えた祈り、そしてコミュニティのための祈りが捧げられています。

礼拝堂には礼拝堂付きの牧師（チャプレン）が居て、毎**主日**に現在あるいは過去に聖路加と繋がりをもつ人々や地域社会の人々と共に礼拝が捧げられています。また、毎週水曜日のランチタイムには学生の自主的な活動であるチャペルアワーが持たれ、十二月にはクリスマス礼拝が大学の大切な行事として行われています。ほかにも病院、看護大学のスタッフや学生・卒業生の結婚式、また聖路加と何らかの関係のある人々の葬儀なども執り行われます。第二、第四主日に奉仕をする聖歌隊を中心にして、十一月二日の**諸魂日**には一年間に逝去された方のお名前を憶えた後にレクイエムの奉唱が行われます。このように礼拝堂では礼拝を中心に種々の活動が行われています。そして、チャプレン室に常駐しているチャプレンは、病院・看護大学の人々の来室を待ち相談に応じています。

教会内のステンドグラスはすべて、J・V・W・バーガミニーが原寸図面を描き、

＊主日
日曜日は、イエス・キリストが復活された特別な日であるため、教会ではこの日を主日と呼ぶ。

＊諸魂日
教会の暦で、逝去されたすべての信徒を記念する日のこと。

その図面をイギリスのペリキントン社に送り注文したと記録されています。そしてその組み立ては、東京尾山台の別府ステンドグラス製造所にて行われました。一九三〇年（昭和五）より設計管理者として関わったこのバーガミニーは、米国聖公会の設計技師として来日し、立教女学院やユニオン・チャーチ（渋谷区神宮前）なども手がけています。また別府一族は一九〇七年（明治四〇）頃からこの仕事に従事し、礼拝堂の仕事は初代と二代目、一九七七年（昭和五二）の修復は四代目によるものです。正面脇と左右にある色鮮やかな薔薇窓と、縦長のランセット窓には、聖ペテロ、聖アンデレ、聖ヨハネらの使徒たちや、イエス、魚、雄鶏、船、錨、貝、星、葡萄など、聖書に登場する様々なシンボルが配され、**神秘的な『光の芸術』**を表しています。

十字架の塔からは、一日三回鐘による聖歌のメロディーが流れます。この**カリヨン・チャイム**は、一九六二年（昭和三七）に日米両国民の親善の証として、米国聖公会有志より寄贈されたものです（シューマリック社製）。その後、一九八七年（昭和六二）にリニューアルされ、二〇〇八年（平成二〇）に電子化されました。

礼拝堂に通じる中央ホールの廊下の床には真鍮のプレートがいくつか埋め込まれています。そのうちの一つは、羽のついた杖に二匹の蛇が絡んだデザインのもので、医術を表すシンボルです。他に七枚のプレートがあり、そこには伝染病をもたらす

＊神秘的な『光の芸術』
佐藤裕、「聖路加国際病院チャペルのシンボル」『聖路加チャペルニュース』No.107：1-12（一九八三）

＊カリヨン・チャイム
音階のある九鐘以上の鐘を組み合わせ、演奏ができるようにした装置。

動物などが描かれています。フェニックスは病気の回復、アラジンの魔法のランプは迷信の戒め、タルバカンはペスト菌を介在する巨大ねずみ、鯛は傷みが早い食品、ネズミ、オウムは伝染病をもたらす動物、天秤は薬学などを象徴しています。これらの伝染病を運ぶ動物は病院の大敵でしたので、廊下にプレートを埋め込み、病院職員が足で踏みつけて歩き厄を祓うというものでした。

礼拝堂に入って後方を見上げると大きなパイプオルガンがそびえ立っています。これは一九八〇年（昭和五五）から七年間病院長を務めた**野辺地篤郎**の尽力で、一九八八年（昭和六三）に設置されました。フランスのガルニエ・オルガン工房にて製作された北ドイツ・バロック様式。三段の手鍵盤と足鍵盤をもち、二〇七七本ものパイプを備えています。二〇〇三年（平成一五）の改修により音色に一層円熟味が加わり、主日やクリスマスなどの礼拝だけでなく、病院や看護大学の感謝礼拝、第一水曜日の『夕の祈り』でも美しいオルガンの音色が響きます。元ニューイングランド音楽院教授の林佑子が主任オルガニストを務め『St. Luke's』のオルガンは世界的にも知られています。

実習中の学生やボランティアの方々が患者さんを礼拝堂にお連れすることも多く、オルガニストたちは、会衆席におられる方のことも常に思いながら弾いています。オルガンの音色に包まれて祈る患者さんの姿は、聖路加に礼拝堂があること

＊野辺地篤郎（一九一九―二〇〇八）
一九四三年（昭和一八）、千葉医科大学医学部卒。東京帝国大学助手を経て一九五〇年（昭和二五）より聖路加国際病院放射線科勤務、一九八〇年～一九八六年（昭和五五～六一）院長。

の意義を改めて実感させてくれます。聖路加の象徴とも言える、この礼拝堂をこれからもわたしたちの精神的な支柱として大切にしていきましょう。

（亀井 智子・金澤 淳子）

聖路加看護大学には、学内のあちこちに由緒ある品が遺されていますね。

礎石と十字架

大学の玄関外壁、および大学と敷地続きの聖路加国際病院第一街区トイスラー記念館左側、そしてチャペルに通じる旧病院玄関右側に礎石が置かれています。

現在の看護大学、および病院の敷地を含む明石町一帯は、一八六九年（明治二）から一八九九年（明治三二）まで外国人居留地に指定されていました。明治時代の前半は、宣教師や宣教医師が次々と派遣され、いくつもの病院や教会、学校などがこの明石町ではじめられました。

一八五九年（安政六）にハリスが港区元麻布の善福寺に米国公使館を開設しましたが、一八七五年（明治八）に築地居留地の明石町（現在の第三街区聖路加ガーデンのあたり）に公館を新設しました。花崗岩でできた石標には、米国のシンボルである星条旗や鷲のマークが彫られており、当時を偲ぶことができます。後に、米国公使館は一八九〇年（明治二三）に現在の元赤坂に移転しています。

米国公使館を含む明石町第三街区の土地一帯は、**聖路加病院拡張計画**のため購入されたものですが、石標はその時に聖路加病院が譲り受けたものです。八個の石標のうち、三個は一九八四年（昭和五九）に米国大使館に日米友好のシンボルとして寄贈され、残る五個は築地の居留地時代を伝えるものとして、中央区文化財に登録され、三個はトイスラー記念館前に、二個は聖路加ガーデンに移設されました。

一九三〇年（昭和五）三月二八日に旧病院の定礎式が行われ、**基礎石**の一面に「神の栄光と人の福祉の為之を献る」と刻まれました。この碑文は現在、徳川家達公の揮毫（直筆）による「神の栄光と人類奉仕のため」（翻訳　東京帝国大学教授姉崎正治博士）に変わっています。

第二次大戦中「神の栄光」と刻まれた礎石は爆撃の目標になるため、一九四四年（昭和一九）に遮蔽されました。同様に、病院塔屋の十字架も切断されましたが、当時の信仰に対する外部圧力について、〝**竹田チャプレン**の苦悩は察して余りあるものがあった。竹田チャプレンと夫人は毎朝チャペルで二人きりで祈りを捧げることを続けられた〟とその時の状況が「聖路加国際病院一〇〇年史」に書かれています。

一九五六年（昭和三一）に病院の接収が解除され、同年九月一八日に旧病院屋上で、十字架奉献式が行われました。礎石を遮蔽していた御影石も外され、前述したトイスラー記念館の左側に移築、保存されました。

＊聖路加病院拡張計画
一九一七年（大正六）、トイスラー院長の募金活動によって集められた四四万ドルで、明石町に一万三〇〇〇平方メートルの土地を購入し、敷地を拡張した。

＊基礎石

St. Luke's International Medical Center
Dedicated to
the Glory of God
And the Service of Humanity.

神の栄光と
人類奉仕のため
聖路加国際医道院
公爵　徳川家達書

＊竹田チャプレン（一八九六～一九七八）
竹田眞一。築地の三一神学校卒業後、聖路加国際病院に勤務。一九一七年（昭和一）に司祭職となり、その一生を聖路加に捧ぐ。

新しい礎石は、本学一号館正面玄関左手側の外壁にはめ込まれています。この礎石は、一九九六年（平成八）九月一四日に現在の聖路加看護大学新校舎の竣工を祝い、日野原重明（当時理事長）の手により直筆されたものです。本学の精神「知と感性と愛のアート」と記されているように、看護と看護大学に対する深い思いがこめられ、正に私達の看護の礎となっています。

図書館を彩る葡萄の意匠とナイチンゲールのステンドグラス

図書館入口の欄間には、ガラスに葡萄の意匠が施されています。これは、一九九六年七月まで旧校舎の玄関ホールの欄間にあった木彫りの飾りから想を得ています。現在、この飾りは、図書館三階に掲げられています。葡萄は、緑陰で憩う人々を思い起こさせるためか、聖書の中では無花果と合わせて平和と豊穣の象徴とされ、記述として多く登場します。「聖路加看護大学図書館のめざすもの」の一つに、安心して学ぶ環境をつくることがありますが、葡萄は、それにふさわしい意匠といえます。

また、館内の階段の踊り場には、大学のシンボルでもあるナイチンゲールのステンドグラスがあります。これは一九九六年の校舎建築の折、檜垣マサから寄贈されたもので、製作者は鈴木幸江（一九七一年卒）と戸田倫子氏です。檜垣は、この校

舎建築のために参与として尽力しましたが、残念なことに完成を見ずに逝去しました。ナイチンゲールのドレスは濃い紫色で、よくみると白い襟には撫子のような花模様があります。撫子は校章の意匠の一つです。背後には光の輪があり、ラテン語で**「光あれ」**と書かれています。その周囲にも撫子が配されており、背景のガラスには葡萄の模様がみられます。

ステンドグラスは東に面しており、早朝、開館時の短い間だけ陽光が入り、ナイチンゲールがもつランプの赤い光が階下に映ります。夜は外から見上げると、室内の灯りを通して浮かび、一日の学びを終えて帰途につく学生を見送ります。

マントルピースと玄関の人形

聖路加看護大学の玄関ロビーでは、マントルピースとその上に「希望」と題した人形が来訪者を迎えています。マントルピースは旧校舎で使用されていたものを新校舎に移設したものですが、当初は新校舎の会議室に置かれる予定でした。しかし、大きさが合わず、一部を切断しなければならないこととなり、現在のロビーに置かれました。

マントルピースの上に飾られている人形は、昭和二二年厚生科を卒業した鐸木能子（旧姓　細野）が本学の新校舎落成を祝い一九九八年（平成一〇）に贈呈したものです。

鐸木は群馬県伊勢崎市の蝋燭問屋の生まれで、前常葉恵子学長と同期生ですが、一九六五年以降人形作家になり日展会友、新工芸会員としてアーティスティックな創作人形を創る一方、伝統技法を生かした新しい気風の雛人形作家として活躍しました。

鳩を抱え、空を見上げている女性の人形像は、平和と希望を表現した作品で、伝統技法に加えた、鐸木独自の人形技法をみることができます。

鎌倉アリスの家のはじまりと新渡戸稲造夫人が愛用した椅子

新渡戸稲造氏は昔、トイスラー夫妻を鎌倉稲村ヶ崎の家に招き、「この家を病院の職員の安息所にしてはどうか」と話されたそうですが、当時は手が届きかねるといった事情があったようです。

その後、氏は、聖路加国際病院新館定礎式（当時）への出席や病気治療を通じて聖路加とのつながりがあり、一九三九年（昭和一四）に聖路加同窓生の休養所として新渡戸満里子**（メリー・パターソン・エルキントン）**夫人が住んでいた別荘を、建物と借地権含め七、五〇〇円で聖路加に譲渡しました。これが、休養所アリスの家です。建物は二〇年前のものであったため、当時としては大金の一、五〇〇円か

＊光あれ
Fait Lux

＊新渡戸稲造（一八六二～一九三三）
盛岡市に生まれる。一八七七年（明治一〇）札幌農学校入学。クラーク博士の影響でキリスト教に入信。東京帝国大学およびジョン・ホプキンズ大学で学び農学博士・法学博士となる。第一高等学校長、東京帝国大学教授、東京女子大学初代学長、国際連盟事務次長、貴族院議員を歴任。一〇月カナダで客死。『農業資本論』（一八九八年）、『武士道』（一八九九年）等の著書あり。

＊メリー・パターソン・エルキントン
フィラデルフィアの実業家の一人娘でアメリカ人。実家は敬虔な清教徒。遺産の一、〇〇〇ドルを使い、色々な事情で就学出来ない児童のための遠友夜学校を夫稲造と共に開設（一八九四―一九四四年）。稲造没後、一九一三年（大正二）まで二代目校長として学校を運営。

けて修復しました。

高橋シュンが寄稿した「聖路加看護大学五〇年史」によれば、「アリスの家の維持には大変お金がかかり、同窓会にアリスの家復興委員会がおかれ、バザーを度々開催して、屋根や垣根等の修繕費用に充て、同窓会からも台所の整備費等を寄贈していました。また、土地が売りに出されたこともあったようですが、先輩達が苦労して手に入れた家であったため、手離すことはしなかった」と記されています。

アリスの家の名前は、学校と看護師のために絶えざる指導と熱心なる後援を続けられたアリス・セントジョン初代主事を記念してつけられました。聖路加幼稚園を開設し、専門学校の分校として一九四七年（昭和二二）には育児科の実習場ともなりました。その後一九六二年、借地であった土地を大学が買い取り、二号館として同窓生のアリスの家が建築され、二〇〇〇年（平成一二）には全面改築されています。

大学旧校舎には、新渡戸夫人が愛用したと伝えられる籐製の大きな椅子があり、学長室に続く廊下に置かれていました。新校舎移転の責任者であった現学部長菱沼（ひしぬま）典子（みちこ）によれば、籐の椅子は傷みがひどく、新校舎では使用できないと判断して移転の時に処分したとのことです。

昭和初期に製作されたブロンズ製の窓枠の再生

大学旧校舎の正面玄関の上には、建物の二階から三階にかけての外壁にブロンズ製の壁飾りがありました。当時の校舎の正面写真には必ず映り、また現在大学の玄関ホールに飾られている校舎風景の油絵にも描かれています。

この壁飾りは、旧校舎落成時の一九三三年（昭和八）に設置され、旧校舎の二階スタディルーム、三階第二教室の窓を覆うほどの大きなものでした。現在では作ること自体が難しいものです。アールデコ様式は、一九二五年（大正一四）パリで開かれた国際装飾芸術博覧会をきっかけに世界中に広まった装飾で、流行の先端をいくデパートなどがすすんで取り入れたようですが、現在はほとんど姿を消しています。

窓枠は、旧校舎を解体する時に取り外され、病院二階の図書室の外壁に移築されています。現在の建物ともよく調和し、七六年経た今でも立派に青銅色を放っています。

旧校舎から新校舎に持って来た品々

大学の総務課に長く在職した**八坂（やさか）ヨシエ**によれば、旧校舎で聖路加看護大学が大切に使用してきた次の品々を新校舎移転のときに運んできたとのこと。現在も使用

ブロンズ製の窓枠

＊八坂ヨシエ
一九八二年四月～二〇〇六年三月在職

されているものもあり、古きよき物の中には、今ではなかなか手に入らない物も含まれています。

・サモワール　卒業式の祝会や、クリスマスの集いのとき等に使用されました。卒業式の祝会では、教員が学生に紅茶をサービスしました。一台は炭、もう一台は電気で使うものです。現在二階の栄養実習室にありますが、修理が必要な状態です。

・教室の椅子　木製の片肘机付きの椅子、および一部籐が編んである椅子は、主に教員の研究室やラウンジでそのまま使用されています。

・旧図書館のスタディルームの椅子。現在、教員ラウンジなどで使用しています。

・雑食器　栄養実習という科目で、調理実習を行った際に使用していた食器類の一部を二階の調理実習室(学食)棚に保管しています。

（亀井 智子・松本 直子）

＊サモワール
ロシア特有の湯沸かし器。一九世紀頃、ロシアで紅茶の普及によって広がった。古くは石炭・炭で沸かした。

聖路加看護大学はどのような将来展望を持っていますか。

聖路加看護大学の将来展望は、本学の原点とつながっています。創立者トイスラーは、一九二〇年（大正九）に聖路加国際病院付属高等看護婦学校をつくりました。学校開設時、高等女学校（現在の高等学校と同等）の卒業を入学資格としました。また、病院付属の看護婦学校であったにもかかわらず、卒業後に聖路加国際病院への就職を義務づけませんでした。この二つの特徴によって、日本の看護の高等教育は聖路加で始まったと評価されています。そして、学校開設後すぐに、学校保健、助産、公衆衛生を教育課程に取り入れました。これは、当時の日本の健康水準や生活環境を考慮した「時代の要請」にもとづいたものといえるでしょう。

その後、聖路加女子専門学校、（三年制の）聖路加短期大学を経て、一九六四年（昭和三九）に聖路加看護大学となり、私学として日本最初の看護学部四年制教育を開始しました。一九七六年（昭和五一）には、看護短期大学卒業生を対象とした編入学制度を全国で初めて開始しました。この制度は一九九七年（平成九）より始めら

れた学士編入制度に引き継がれています。

一九八〇年（昭和五五）には大学院博士前期課程が、一九八八年（昭和六三）には大学院博士後期課程が設置されました。前者は全国で二番目、私学では最初でした。後者は看護学研究科として日本で最初の博士課程となりました。その後、大学院博士前期課程に専門看護師コースを開講（一九九七年）、さらにウィメンズヘルス・助産学専攻を増設（二〇〇五年）して、助産課程を大学院教育に移行しました。

さらに、看護実践開発研究センターの開設（二〇〇二年）にあわせて、二一世紀COEプログラム「市民主導型の健康生成をめざす看護形成拠点」の採択（二〇〇三年）とその後五年間の研究・実践活動は、本学の大きなターニングポイントとなりました。つまり、これまでの医療・看護提供者主導型から市民主導型の健康づくりというパラダイム転換を行ったのです。研究センターは、看護実践開発に関わる研究を行い、看護サービスにおけるモデル的な実践の場を提供し、市民や看護職への生涯学習支援を行ない、国際的・学際的な交流を促進していくとともに、研究助成金情報の提供や管理などの研究支援と、研究成果をデータベース化して情報を発信するなど、本学の活動を大きく拡大させています。二〇〇七年（平成一九）一〇月よりスタートした文部科学省の「がんプロフェッショナル養成プラン」による「南関東圏における先端的がん専門家の育成」事業によって、がん看護専門看護師教育の充実と、がん化学療法看護認定看護師教育が実施され、MD Anderson Cancer Centerとのがん看護交流ワークショップも実施されています。また、一般財団法人聖路加国際メディカルセンターの産科クリニックは、本学の教員が中心となり助産師が主体となった助産ケアを市民に提供しようというコンセプトをもって進行中です。

本学のさまざまな活動は、次のミッションに集約されます。「本学は基督教精神を基盤として、看護保健の職域に従事する看護専門指導者の育成を目的とする。即ち、治療予防保健指導の各面に必要な看護に関する科学的知識を養い、技能の熟達を図り、人格の涵養につとめ、指導者としての能力をたかめ、学術を中心とした看護の実践と応用によって、看護および看護教育の進歩発展に寄与し、もって国民の福祉に貢献することを使命とする」（学則第一条）。看護学部は三〇〇名、大学院は九〇名を定員とする単科大学としての聖路加看護大学は、看護学の研究・教育そして、すぐれた実践家としての「看護専門指導者」を育成し、創立者トイスラーの残したメッセージ〝最善をつくせ、しかも一流であれ（Do your best and it must be first class）〟を追求しています。

さらに、二〇一三年から具体的に動き始めた学校法人聖路加看護学園と一般財団法人聖路加メディカルセンターとの法人一体化構想の進展は、創立者トイスラーが

意図した「生きた有機体」としての原点回帰を実現させ、次世代に向けた大きな飛躍と変革をもたらします。法人一体化構想は、学部教育、大学院教育・研究、継続教育・社会人教育、グローバル化の４つの領域における具体策の実現により、日本における看護学教育のリーディング大学として牽引的役割を果たし、看護職の多様なキャリア育成を実現し、臨床および公衆衛生の現場により密着したエビデンスに基づく看護の提供モデルを構築するとともに、大学運営の財政的基盤の安定化にも大きく貢献するものとなります。

（井部　俊子）

このように、
いつまでも存続するものは、
信仰と希望と愛と、
この三つである。
このうちで最も大いなるものは、
愛である。

新約聖書
コリント人への第一の手紙
第13章13節

おもな引用・参考文献

・天野郁夫編（一九九七）．大学を語る三二人の学長．玉川大学出版部
・桧垣マサ（一九八三）．建学の精神を生かした看護教育．看護．三五（一四）．一三―二〇
・金子光編著（一九九二）．初期の看護行政：看護の灯たかくかかげて．日本看護協会出版会
・金子光（一九六三）．看護の灯たかくかかげて：新看護制度一五年のあゆみ．医学書院
・金子光（一九九四）．看護の灯高くかかげて：金子光回顧録．医学書院．
・川島みどり他（一九九三）．一つの看護教育史一九四六―一九五三．東京看護教育模範学院で学んだ人々．健和会臨床看護研究所
・厚生省健康政策局計画課監修．ふみしめて五十年．保健婦活動の歴史．（財）日本公衆衛生協会（一九九三）
・中村徳吉（一九六八）．聖路加国際病院創設者ルドルフ・ボリング・トイスラー小伝．聖路加国際病院
・日本看護協会編（一九八七）．日本看護協会史第一巻　昭和二一年（一九四六―）昭和三二年（一九五七）．日本看護協会出版会
・大槻虎男（一九九二）．聖書植物図鑑．教文館
・ライダー島崎玲子、大石杉乃編著（二〇〇三）．戦後日本の看護改革―封印を解かれたGHQ文書と証言による検証．日本看護協会出版会
・聖路加チャペルニュース（一九六二―）．聖路加国際病院礼拝堂
・聖路加同窓会編（一九八一）．聖路加同窓会一〇年の歩み：一九七〇―一九八〇 聖路加看護大学創立六〇周年を記念して．聖路加同窓会
・聖路加同窓会編（一九九四―）．聖路加同窓会だより（同窓会誌「会報」）．聖路加同窓会
・聖路加看護大学（一九七〇）．聖路加看護大学五〇年史．聖路加看護大学
・聖路加看護大学創立七〇周年記念誌編集企画委員会編集（一九九〇）．聖路加看護大学の七〇年：一九二〇―一九九〇．聖路加看護大学
・聖路加看護大学大学院開設二〇周年記念行事実行委員会編（二〇〇一）．聖路加看護大学大学院開設二〇周年記念誌：一九八〇―二〇〇〇．聖路加看護大学
・聖路加看護大学編（一九七二）．聖路加看護大学学園ニュース．聖路加看護大学
・聖路加看護大学理事会議事録・評議員会議事録
・聖路加看護大学紀要委員会（一九七三―）．聖路加看護大学紀要．聖路加看護大学
・聖路加国際病院一〇〇年史編集委員会（二〇〇二）．聖路加国際病院の一〇〇年．聖路加国際病院
・聖路加国際病院八〇年史編集委員会（一九八二）．聖路加国際病院八〇年史．聖路加国際病院
・聖路加国際病院（一九五五―）．聖路加国際病院内広報誌「明るい窓」．聖路加国際病院
・聖路加国際病院聖ルカ礼拝堂のご案内．リーフレット．聖路加国際病院礼拝堂

改訂版編集後記

聖路加看護大学大学史編纂・資料室　室長　渡部 尚子

大学の精神は、その歴史によって形成されます。この小冊子『聖路加看護大学のあゆみ』は、二〇一〇年一月の創立九〇周年を記念して、聖路加看護大学の過去・現在・未来を、本学学生および教職員・同窓生、そして一般の方々にも語り伝えるために編まれました。そして毎年の新入生・新任教職員に配布して三年を経過した二〇一三年、初版を全体的に見直した改訂版を刊行する運びとなりました。

この冊子は二五の項目から構成されています。これらの項目は、本学教職員から「聖路加看護大学について学生へ伝えたいもの」として提案された様々な意見をカテゴリー化し、最も多く提案のあった内容から選んだものです。その執筆は、本学教職員および同窓会役員を中心にお願いしました。また、選定に関しては、本学の歴史や状況が全体的に概観できるよう、各時代の出来事を入れました。

本冊子の主要な読者は、本学学生・教職員・同窓生であることは云うまでもありませんが、本学がどのような大学であり、また社会（特に看護界）においてどのような役割を果たしてきたのか、或いは果そうとしているのか、広く一般の方々にも知って頂くために、執筆者には読みやすく親しみやすい表現で書いていただきました。

年号については、西暦を中心にし、カッコ内に元号を入れることを原則としました。三つの看護職（保健師・助産師・看護師）についてのそれぞれの呼称は、その時代の呼称（保健婦・助産婦・看護婦）を使用することも良しとしております。

改訂版では各項目の内容で重複しているところを整理し、その分新たな説明を加えるなど、より一層歴史がわかりやすくなることを目指して全体的に調整を行いました。その他初版と大きく異なる点として、完了したCOEプロジェクトについて全面的に記述し直しました。また執筆者の意向を受け、初版の一四章を改訂版では割愛しています。さらに、歴史の記述であることを踏まえ、学内者・卒業生に対する敬称をすべて省略しました。

最後に、この冊子作成にあたり、資料提供・執筆をはじめ、様々な協力を下さった本学教職員および同窓生の皆様に心からお礼申し上げます。また、この冊子刊行にあたって、予算的支援を賜りました同窓生の皆様に感謝申し上げます。

記述に関しては、歴史的検証と誤謬についてご指摘下さいますようお願い申し上げます。

二〇一三年一二月

聖路加看護大学　略年表

西暦	学校関連の出来事　〈　〉は病院関連の出来事	主な看護・社会一般の出来事
創立以前		
一九〇〇	一月 トイスラー来日	
一九〇一	三月 看護学を学ぶため荒木いよ看護婦長渡米	文部省、学校衛生課設置
一九〇四	〈聖路加病院開設（二〇床）〉 聖路加国際病院において看護婦教育を開始（生徒数八名） （米国式看護教育・教育期間：二年、入学条件：高等女学校卒業）	
一九一二	初代校長 ルドルフ・B・トイスラー 就任	
一九一四	〈聖路加病院新築資金の一部として大正天皇より御内帑金五万円下賜〉	私立産婆学校産婆講習所指定規則制定
一九一五		第一次世界大戦勃発
一九一八	ミセス・セントジョン米国より看護教育のため招聘 〈トイスラー院長、ミセス・セントジョン救護班としてシベリアへ赴く〉	看護婦規則公布 第一次世界大戦終戦
聖路加国際病院付属高等看護婦学校		
一九一〇	聖路加国際病院付属高等看護婦学校開設 （教育期間：三年、応募資格：高等女学校卒業、八〇名応募し、二七名入学、一五名卒業）	ナイチンゲール生誕一〇〇年
一九一三	九月 関東大震災により校舎・寄宿舎・病院焼失 一〇月 〈天幕病院（二二五床）設営〉、学生は天幕病院で起居し学習・実習を続ける 〈母子保健を中心とした訪問看護事業開始〉 〈東京市長依頼にて、院内に児童健康相談所開設〉	
一九一四	仮校舎・寄宿舎完成 〈トイスラー院長勲五等瑞宝章受章〉	
一九一五	公衆衛生看護婦ミス・ヌノ招聘 〈スクールクリニック開設〉	
一九一六	築地産院にて産婆実習開始 〈文部省に学校保健婦を派遣〉	昭和に改元
聖路加女子専門学校		
一九一七	〈財）聖路加女子学園設立、文部省専門学校令に基づく聖路加女子専門学校開設	健康保険法施行
一九二〇	〈公衆衛生看護部誕生（ミス・ヌノ、斉藤みどり）〉 研究科（公衆衛生学専攻）開設	
一九二一	他校の卒業生の研究科入学を許可	満州事変
一九二三	聖路加女子専門学校新校舎落成 ロックフェラー財団より四〇万ドルの寄付	日本、国際連盟を脱退
一九二四	〈聖路加国際病院本館完成（奉献式・開院式）〉 八月 トイスラー校長逝去 第二代校長 久保徳太郎 就任	
一九二五	修業年限四年に延長し、研究科廃止 〈病院内に「東京市京橋区特別衛生地区保健館（中央保健所の前身）」設立し、病院のスタッフと公衆衛生事業を移管〉	日中戦争勃発 保健所法公布 厚生省設置
一九二六	〈チャペル完成〉	第二次世界大戦勃発
一九二七	〈財団法人聖路加国際メディカルセンター設立許可を受ける〉	
一九三八	他の看護婦学校出身者を対象とする公衆衛生看護学専修科（六ヶ月）設置（二回生で中止）	七月　保健婦規則制定
一九三九	第三代校長 橋本寛敏 就任	一二月　太平洋戦争勃発
一九四〇	二月 校歌・校旗・校章制定	
一九四一	三月 ミセス・セントジョン、ミス・ヌノ米国へ帰国 七月 興健女子専門学校に改称、別科（二年）を附設 一一月 中等学校教員免許（生理・衛生）無試験下附	
一九四二	第一種保健婦学校に指定 産婆学校の指定	
一九四四	〈聖路加国際病院から大東亜中央医道院に改名〉 三月 戦時下体制に則り厚生科修業年限を三年に短縮、研究科一年を設置	
一九四五	一〇月 中・高等女学校教員免許（家政科・育児）無試験下附 三月 東京大空襲により病院に傷病者多数受け入れ、学校地下体操場も病室となり学生も救護に従事する 八月 無期休校	
一九四六	九月 GHQに病院・学校とも接収 一〇月 授業再開（教室は中央保健所） 〈隣接する都立整形外科病院に移転し、診療開始〉	八月　第二次世界大戦終戦 GHQ公衆衛生福祉局に看護可設置
一九四七	一二月 校名を聖路加女子専門学校に戻す 六月 GHQの指導のもと、東京看護教育模範学校となり、日本赤十字社救護看護婦養成部と合同授業開始	
一九四八	アリスの家（同窓生保養所、於鎌倉）を分校として聖路加幼稚園を開設し、育児科の実習実施 六月 研究科一年設置	日本国憲法施行
一九五〇	研究科卒業生に中・高等女学校教員免許（家政育児）無試験下附 九月 第四代校長 ミス・ホワイト 就任、主事 湯槙ます 就任 戦後初の看護職の留学に卒業生四名（湯槙ます、金子光、高橋シュン、中道千鶴子）が選ばれカナダ・米国へ留学	七月　保健婦助産婦看護婦法（以下、保助看法）制定 日本看護協会発足
一九五三	保助看法に基づく甲種看護婦学校に指定 二月 〈病院の旧館接収解除、旧館に戻って診療再開〉 四月 旧館校舎（木造校舎）返還、築地での授業再開 五月 学校法人聖路加看護学園設立	
一九五四	聖路加短期大学開設	

西暦	学校関連の出来事　〈　〉は病院関連の出来事	主な看護・社会一般の出来事
	聖路加短期大学	
一九五四	短期大学初代学長（通算第四代）ミス・ホワイト 就任	
一九五六	主事湯槙ます 東京大学助教授に就任し、後任に主事前田アヤ 就任	
一九五七	聖路加国際病院・校舎接収解除（本館返還により、全ての接収が解除）	
一九五八	短期大学第二代学長（通算第五代）橋本寛敏 就任	
	専攻科（一年）設置	
一九六〇	保助看法に基づく保健婦学校に指定	
	ミセス・セントジョン勲五等瑞宝章受章（看護教育への貢献に対して）	
	〈橋本寛敏院長藍綬褒章受章〉	
一九六一	〈外来部新築完成〉	
一九六二	保助看法に基づく助産婦学校に指定	
	聖路加看護大学	
一九六四	四月 聖路加看護大学開設	オリンピック東京大会開催
	九月 保助看法に基づく保健婦学校・看護婦学校に指定	
	大学初代学長（通算第五代）橋本寛敏 就任	
一九六六	〈橋本寛敏院長勲二等旭日重光章受章〉	
一九六七	保助看法に基づく助産婦学校に指定（四年制大学で初）（～二〇〇八年）	
	教員免許高等学校教諭二級（保健）取得の教職課程認可（～一九八九年）	
一九六八	聖路加看護大学第一回生卒業（三八名）衛生看護学士の称号授与	
一九七〇	創立五〇周年記念	
	図書館建設（同窓会より寄贈）、第一回公開講座	
一九七二	九月 学園ニュース創刊号発刊	
	〈聖路加国際病院新病院建設計画〉	
一九七三	学生寮全寮制廃止（希望者のみ入寮）	
一九七四	大学第二代学長（通算第六代）日野原重明 就任	
	教員免許高等学校教諭二級（看護）取得の教職課程追加認可（～一九八九年）	
一九七六	学生寮全面廃止、編入学制度（三年次）開始（～一九九八年）	
	工藤正四郎教授（微生物学）勲二等旭日重光章受章	
一九七七	前田アヤ及び工藤正四郎名誉教授授与	
	第一回体育デー、同窓会第一回米国研修旅行	
一九八〇	聖路加看護大学大学院博士前期課程設置	
	同窓会によるミセス・セントジョン基金設置	
	郡山（前田）アヤ名誉教授勲五等瑞宝章受章	
一九八一	衛生看護学士の称号を看護学士に改称	沖縄返還
	三階大教室の増築完成	日中国交正常化
一九八二	第一回修士課程修了（六名）	
	近藤潤子教授（母性看護学）エジプト・アラブ共和国より勲二等受章	
一九八四	〈聖路加国際病院創立八〇周年記念〉	
	聖路加看護大学大学院博士課程開設準備開始	
一九八八	大学開設二〇周年記念研修会	
	聖路加看護大学大学院博士課程増設	
	WHO西太平洋地域コラボレーションリサーチセンターの候補に挙がる	
一九八九	創立七〇周年記念	
一九九〇	WHOプライマリーヘルスケア看護開発協力センターを受託	
	〈聖路加国際病院新病院完成〉	
一九九二	日野原重明学長勲二等瑞宝章受章	ICN（国際看護師協会）大会東京で開催
一九九三	〈サリン災害救助の拠点として多数の傷病者を救護〉	
一九九五	聖路加看護大学新校舎完成	
一九九六	学士編入学制度（二年次）開始、博士前期課程にCNS（専門看護師）コース開始	
一九九七	大学第三代学長（通算第七代）常葉惠子 就任	
一九九八	学則改正により男子学生に門戸を開く	
二〇〇一	大学院開設二〇周年記念	
	立教大学と学術交流協定を結ぶ	
二〇〇二	大学二号館開設	
	看護実践開発研究センター設置	
	大学院博士課程社会人入試開始	
二〇〇三	文部科学省「二一世紀COEプログラム」採択	
二〇〇四	大学院修士課程社会人入試開始	平成に改元
	海外の大学と初めて学術交流協定締結、オレゴンヘルスサイエンス大学（米国）、ヨンセイ大学（韓国）と結ぶ	ICM（国際助産師連盟）学術大会、神戸で開催
	大学第四代学長（通算第八代）井部俊子 就任	
二〇〇五	〝るかなび〟開設	地下鉄サリン事件
	大学院（ウイメンズヘルス助産学専攻）増設（保助看法に基づく助産婦学校に指定）	
	マヒドン大学（タイ）、マクマスター大学（カナダ）と学術交流協定締結	
二〇〇七	日野原重明理事長文化勲章受章	
	養護教諭一種免許に関する科目開講	ICN大会を横浜で開催
	カリフォルニア大学サンフランシスコ校と学術交流協定締結	
二〇〇八	「がんプロフェッショナル養成プラン」開始	東日本大地震
二〇一一	認定看護師教育課程開設	

執筆者

麻原きよみ	有富　洋子	飯田澄美子	井部　俊子
今村　節子	岩井　郁子	岩間　節子	内田　卿子
及川　郁子	大熊　恵子	金澤　淳子	亀井　智子
萱間　真美	佐居　由美	進藤　　務	ケビン・シーバー
高橋百合子	田代　順子	菱沼　典子	日野原重明
福井　次矢	堀内　成子	松谷美和子	松本　直子
宮本　昭子	森　　明子	安ヶ平伸枝	柳橋　礼子
山口　喜義	山田　雅子	結城　瑛子	渡部　尚子

聖路加看護大学大学史・編纂資料室委員会
ブックレットワーキンググループ

大森　純子	佐居　由美	進藤　　務	中村　綾子
新沼　久美	松本　直子	渡部　尚子	

（以上、五十音順）

聖路加看護大学のあゆみ

2010年1月25日　初版第1刷発行
2013年12月20日　第2版1刷発行

企画・編集　聖路加看護大学大学史・編纂資料室委員会
　　ブックレットワーキンググループ

発 行 者　聖路加看護大学
　　〒104-0044　東京都中央区明石町10-1

デザイン　株式会社 ウチダテクノ　坂本やす葉

印　　刷　勝美印刷株式会社